
力の行方 ルーフェイア・シリーズ08

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

力の行方 ルーフェイア・シリーズ08

【NZコード】

NZ8569E

【作者名】

ひつこ

【あらすじ】

権力、野心、交錯するさまざまな力。依頼を受けて任務に同行したルーフェイアたちの、見たものとは？？心優しい美少女が繰り広げる、異色の学園ファンタジー第8弾 シリーズの第8作です。ここから少し路線が変わり、外向きの話が多くなります 反王道、「無情」という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 携帯版は、1行毎の空行。「改行です 現在、第15作「拙き者へ」を連載中

Ruffer

「おい、ルーフェイア。さつきタシュア先輩たちがお前のこと、探してたぜ？」

授業が終わって教材を片付けていると、そういマドから声をかけられた。

「あたしを……先輩が？」

ちょっとありえない話に、少し怖いような感覚を覚える。

「ほんとに……？」

「こんなことでウソついたって、しゃあねえだろ。つか伝言忘れた時の方が、怖いっての」

それは確かにそうだ。

けれどあたしが先輩を探しに行くならともかく、その反対があるなんて。

「食堂で待つてたから、早く行つたほうがいいぜ？」

「……そうだね。そうする」

急いで机の上を片付けて、あたしは立ちあがつた。教材がけつこう重い。

「ルーフェイア、それ置いていきな。あたしが部屋に届けとくから見かねたんだろう、シーモアがそう言つてくれた。

「ありがと。えっと、じゃあ頼んでいい？」

「構わないさ。さ、早くいきな」

シーモアの好意に甘えて、手ぶらで教室を出る。

いつもと同じ光景。

中央部のホールへ続く渡り廊下を、他の生徒とすれ違いながら渡る。中には話しかけてくる生徒もいた。

「やあ、ルーフェイア。どこ行くんだい？」

「食堂までです」

「誰だろ？ 上級生なのは間違いないけど、名前まで分からない。タシュア先輩なら全生徒を覚えているから、きっとわかるんだろううけど……」

「じゃあさ、俺も一緒に行くからなにか食べないか？」

「ありがとうございます。でも今、タシュア先輩に……呼ばれててとたんにその先輩の顔が引き攣つた。

「た、タシュアってあの、タシュアかい…………？」

「えっと……タシュアって先輩、そんなにたくさん……いるんですね？」

あたしにはあのタシュア先輩以外、心当たりはない。どうやらこの先輩もそつらしかった。

「悪いことは言わないから、止めた方がいいんじゃないかな、行くの。いつたい何をされることか……」

「でも、あの、タシュア先輩……いい人ですよ？」

この一言で、今度は先輩が石化した。口をぱくぱくさせたまま、何も言えなくなる。

どうしてだろう？

あたしがこいつ言つと、ほとんどの人が石化する。ともかくこれ以上タシュア先輩を待たせて怒られるのも嫌なので、おことまることにした。

「あの、名前は存じませんが先輩、失礼……しますね？」

「あ、ああ……」

昇降台を降りると、こつものよひでんやつとした風が駆けぬけた。

玄関に飾られている水盤を、水が流れる音が響く。
はじめて見た時、不思議なくらいに澄んで見えたこの校内。その印象は、いまでも変わらない。

あれから、ちょうど一年。夢を見ているような気がする。
でもその夢は覚めることがなくて、あたしを取り巻きつけているだけだ。

覚めませんよひ。

わかつていても、いつもそつ願わずにはいられない。
ある日田が覚めたらそこはやっぱり戦場で、これはぜんぶ夢。そんなふうになりそうで仕方がなかつた。

これが夢じやないと信じられるようになるまで、どのくらいかかるのだろう?

せめてこの学院を卒業するまで、このままドコられますよひ。

さう祈りながら廊下を歩く。

もう何度も歩いて慣れているはずなのに、それでも足元が浮いているような気がした。

廊下を曲がって、中庭へ足を向ける。

図書館、診療所、そして食堂。

傭兵学校のはずなのに、ここにいると戦場を忘れそうだ。

広くて清潔で小綺麗な食堂の中も、まるで平和だった。たくさん
の生徒たちが、お喋りをしている。

それをひととおり見渡して、あたしは先輩たちを見つけた。誰か
にぶつかったりしなによつて、ゆっくり歩いてそつちへ行く。
でも声をかけようとして、あたしは躊躇つた。

先輩たちの周り、空気が違つ。

踏みこじゅうけない、そんな雰囲気だつた。

時折交わされる言葉は少ない。でもそこには、絆が見える。
その一言一言、何気ない仕草。そんなところから互いへの思いやり
が感じられた。

いいな、と思つ。

父さんと母さんもそつだね、こんな風にお互いに相手を信頼して、尊敬できるなんて。

穏やかに会話を続ける先輩たちが、見ていってとても羨ましかった。

いつかあたしにも、こんな風に話せる相手ができるんだろうか？

そんなことを考えながら、ぐるぐるこまわりとじていたのだらう。「ルーフュニア。そんなところに立つては、迷惑ですよ」

「あ、すみません」
さつそく先輩に注意される。

でもよく考えたら、呼び出したのは先輩だつたよつな?
ナビやつぱつたといひで、また怒られるだけだらう。

「ともかく座りなさい」「はい」

向かい合わせに座る先輩たちの間に入る格好で、あたしも椅子にかけた。

気をつけないと、またいらないことを言つて怒られそうで、ともかく落ちつかない。

「あの、お呼びだって、聞いたんですけど……？」

恐る恐る、タシュア先輩に訊いてみる。

「呼んだのは、私ではありますよ
「え？」

「イマド、確かに「タシュア先輩が」って言つてたのに。
でも怒られないところを見ると、タシュア先輩が全く無関係とい
うわけでもないらしい。

首をかしげるあたしに、シルファ先輩が言葉をかけた。

「いや……呼んだのは私なんだが」「
「えつ！ あたし……タシュア先輩が、って
「ですから、私は呼んでいませんよ」

「イマド、

きつと彼のことだから、シルファ先輩から話を聞きながら、タシ
ュア先輩だけ頭に残つたんだろう。
けどさいしょからシルファ先輩だとわかつてれば、あたしこんな
に、じきじきしなくて済んだのに。

「えつと、じゃあ、ほんと……タシュア先輩じゃ、ないんですね
？」「
「ああ。私が呼んだ」
「やれやれ……また何か言われるとでも思つたのですか」

タシュア先輩の視線が冷たいけれど、とりあえずほつとした。シ
ルファ先輩なら優しいし、ことあるごとに怒られなくて済む。

「それで、話つてなんですか？」

「仕事の依頼だ」

「？」

また混乱する。

シルファ先輩と違つて、あたしは傭兵隊の受験資格さえ、満たしていない。だからあたしに、任務が回ってくるはずもなかつた。だいいち一般生のあたしが一緒に行つたりしたら、むしろ減点対象になるんじゃないだろうか？

話が飲み込めないあたしに困ったのか、シルファ先輩は助けを求めるみたいにタシュア先輩の方を見たけど、知らん顔をされた。

意外とシルファ先輩にも、厳しいんだ。

自分のことは自分で、つてとこなんだろうか。

「すまない、言葉が足りなかつたな……」
「足りない、というレベルではないでしょ！」

申し訳ないけど、こればかりはタシュア先輩に同意したくなる。「説明は簡潔に」とはよく言われるけど、簡潔すぎるのも問題だ。何よりシルファ先輩への依頼が、どうしてあたしと関係あるんだろ？

「その、なんだ、今回の任務で子供が必要なんだ」「子供……確かにあたし、小さいんですけど……」
なんか面と向かつて言わると、ひどい言葉のよつた気がする。でも、否定できないところが……。

「いや、そういう意味じゃなくて……ともかく任務で、年齢的にルーフハイアくらいの子がいるんだ」

「ううなんですか？」

ようやく話が見えてきた。頭の中で整理してみる。

シルファ先輩が学院から何か依頼を受けたのは、間違いなさそうだ。そしてその任務にはどうやら、子供？が必要らしい。

それでシルファ先輩、あたしに話を振ってきたんだね。もしかするとタシュア先輩が、名前を挙げたのかもしね。

「嫌なら、ムリにとは言わない。他をあたるか？」

「いいえ、かまいません」

シルファ先輩から頼まれて、断る理由なんてない。

「すまない。きっとお礼はするから」

「あ、じゃあ、あの、ケーキが」

つい、そう答える。でも以前食べた先輩の手作りケーキ、そのくらいおいしかった。

「なんだ、そんなものでいいのか？」

「はい。先輩のケーキ、とっても……おいしいです」

「おやおや、欲のないこと」

タシュア先輩は呆れてるみたいだけど、あたしはお金よつもひとつほづがいい。また食べられるかと思つと嬉しくなる。

「どんなケーキがいいんだ？」

「えつと、あたし、よく知らなくて……。でも、白いのがいいです」

「白いの……生クリームか？」

「え？ ケーキって生なんですか？」

あれ？

先輩たちが沈黙しかやつた……？？

「ええと……ケーキが生なんじゃなくて、クリームが生なんだ
しばらく聞を置いて、そうシルファ先輩が言ひ。

「生で食べて、平気なんですか？」

おなか壊さないんだろ？

？

なんかシルファ先輩、引き攣つてるよ？

それにタシュア先輩、露骨にまなざしが冷たい……？？

そして銀髪の先輩は一言。

「どうやら学院では、一般常識も教える必要があるみたいですね
……す、すみません」

どうもあたし、世間一般からかけはなてれるりしご。
もちろんこれじゃないけど、いちおう勉強？はしてる。
けど世間って奥が深くて、なかなか覚えられないでいた。
やっぱりあたしあのまま、戦場にいたほうが良かつたんだろ？
ため息が出る。

「まあ、少しづつ覚えれば大丈夫だらう。私も教えるから。
といひで詳細を少し詰めたいから……場所を、移動したいんだが
「あ、はい」

シルファ先輩に慰められながら、あたしは一緒に食堂を出た。

Sympa

どこへ移動しようかと思つたが、結局自分の個室へと向かつた。
ここならばまず、他の生徒に聞かれる心配はない。

女子寮2階の一一番奥　上級生の資格持ちは低い階が多い　へ
と向かつた。

「あたしこの階……入ったの、初めてです……」

雰囲気がどこか違うと、ルーフェイアは落着かない様子だった。
一方でタシュアは平然としたものだ。だいいち彼の場合、自分が女子寮にいることさえ気にしていないだろう。

もつとも個室を持つくらいになると、もともとこの手の事に関しては、けつこう緩やかなのだが。

それに対して、ルーフェイアが任務同行を承諾してくれて良かつた、と思う。そのへんの上級隊を上回るのではないかといつ彼女なら、戦闘能力等に申し分はない。

正直、これで断られたらやっかいだとは思つていたのだ。彼女ほどの戦闘能力を持つていて私が良く知つている女子となると、他に思いつかない。

ただルーフェイアの場合、一般常識には不安があるが……。

戦場育ちだという噂は聞いているのだが、それにしても疎すぎる。
普通はもう少し、知つても良さそうなものだ。

これできちんと、任務がこなせるのだろうか？

一抹の不安を覚えるが、当人はそれほど気にしていないようだつた。

「それで先輩、任務つて……どんなのですか?」

部屋に入り私がドアを閉めたとたん、無邪気な調子で訊いてくる。さすがというべきか、これから任務に対して「怖い」といった感覚は持ち合わせていないようだ。

「いちおう、要人の警護だ。といつても、相手は子供なんだが

「あ、それであたしが……でもそれじゃ、けつこう大変ですね?」

「そうだな」

警護といつといわゆる警備員を思い浮かべるが、そんな単純な話でわざわざ、シエラの上級傭兵を雇つたりはしない。つまりは守らるべき要人に、かなりの危険が予測されるということだ。

これを24時間続けて守りきらなければならないのだから、精神的にも肉体的にもかなり厳しい。

その点を、ルーフェイアも心配したようだった。

「今回はタシュアも居ないから、人数を増やすつもりだ

「え? タシュア先輩が……?」

意外、といった表情で少女が訊いてくる。

まあ確かに、わたしとタシュアがペア、というのがいつものパターンだが……。

「私は今回は参加しませんよ。クライアントの意向で、女性がいいそうですから」

見た目は普段と変わらないが、そう言つタシュアの口調には、蔑みが混ざっていた。なにかそれなりの理由があるならともかく、こんな風に男女を区別するのを彼は嫌う。

「まあ、それほど複雑な任務ではありませんから、大丈夫だと思いますがね」

いつもの憎まれ口。

一瞬ルーフェイアがなにか言いたそうにしたが、それを私はとどませた。またいらぬことを言つて、タシュアに泣かされるのも可哀想だ。

「 上級隊からあと一人くらい、学園長にお願いしようとは思つてているんだ。 」

それにできればルーフェイアのクラスから誰か、連れて行けるといいんだが」

「 そうですね。シーモアなんか、きっとこう思います」

そう言うルーフェイアの横顔を見て、私は「おや」と思った。
いつものにこやかな表情は変わらない。ただ雰囲気が、どこか違うのだ。

「 それで任務地はどこですか？ 場所によつては、あたし心当たりがあります。 」

それに警護つて言つても、服装なんかもそれなりに用意しないといけないんじゃないでしょうか？

あと武器の携行も、けつこう制限されますよね？」

矢継ぎ早の質問。これには私もあっけにとられた。

「これほど察しがいいとは。

見ればタシュアは、面白がっているような表情だった。

「場所は……アヴァンだ。クライアントは、アヴァン公国繼承権第1位の王太子。だが実際に警護するのは、第2位になるその息子だな」

さつき聞いてきたことを伝える。

「海を越えた隣国、アヴァン帝国が瓦解後できたこの公国は、シエラ学院のお得意様だ。土地と人は多くないが、金融立国でお金だけはある。そういう条件を上手く使って、軍事関係のかなりをシエラに外注している、珍しい国だつた。

「服装の指定はないな。ただ昼間は、クライアントの学校の制服で、支給されるそうだ。

「ただ武器は確かに 制限されるだろうな」

「そうですか。でも校外だと私服になりますから、用意した方がいいような気もしますし……。

武器の方は、いろいろ対策を練らないと、きっとダメですね」

先ほど「ケーキが生」などと、妙な質問をしていたのとは大違いだ。

「あと、情勢はどうなつてますか？ 追加で依頼がきている以上、そんなに平穀じやないと、思うんですけど……」

「情勢は、未確認情報だが、過激派の動きが活発化しているらしい。アヴァンの諜報部は、建国祭を何らかの形で狙っていると、にらん

でるようだ」

本当にこの少女は、外見だけで判断できないと思い知らされる。そんなルーフェイアに多少戸惑いながら、私はこの子相手に、詳細を詰めていった。

Ruffer

シルファ先輩の個室で詳細を詰めると、けっこう厄介な任務だった。

まず警護する相手というのが、アヴァン公国の王子。しかも、過激派が動いてるらしい。

これだけだつて十分厄介なのに、この王子を通つてる学校まで含めて、フォローしなくてはいけないという。
せめてもの救いは、アヴァンの建国祭まで、期間が短いことだろつか？

屋敷にこもつてれば、問題が少ないのに。

おおっぴらな警護ならともかく、こういう隠密の任務じゃ目立つ武器の携行もできない。あたしの太刀だつて微妙だし、シルファ先輩のサイズ（大鎌）は間違いなく無理だろ。

これがいちばん厳しかった。あたしも先輩もサブの武器を持つているし格闘技も使えるけれど、戦闘能力の低下は避けようがない。

「魔法と精霊が頼り、ですね
「そういうことになるな」

けど魔法つて、意外と小回りが利かない。威力が大きくなればなるほど、容赦なく周囲を巻き込んでしまう。
精霊にいたつては、言つまでもなかつた。

「ともかくこゝで言つても仕方がない。手持ちでやりくりするしかないだろ」

「ですね。 あー。」

「ん？」

あたしが小さく声を上げたから、先輩は不審に思ったみたいだ。

「どうしたんだ？」

「ええとその……同行する人数、増やせませんか？ あと1人か、2人くらい……」

ちょっとと説得できるか自信がないけれど、とりあえず言つてみる。

「そのくらいなら大丈夫だろうが……なにかいに考えでも？」

「ナティエス、呼びたいんです。あとできれば、ミルも」

「ミル……あの、ミルか？」

案の定、シルファ先輩の顔色が変わった。タシュア先輩も呆れた顔になる。

「ナティエスはともかく、ミルドレッドなど連れていつてどうするのですか？」

かき回された挙げ句、任務に失敗しそうですがね

いつもながら厳しい。でも今回は、この2人を連れていった方がいいような気がした。

ナティエスはああ見えて、いろいろ特技がある。とくにシーモアがいれば、スラム出身同士で立つことなく、様々なことをやってのけるはずだ。

そしてミルは……。

「ミルは、アヴァンをよく知っています。地理的にも、情勢的にも。ですから、一緒に行つてもらつた方がいいと思うんです」

現地を知っている人間がいるのといないのとでは、そういう状況

が違つてゐるはずだ。

「本当なのですか」

「はい」

嘘みたいな話だけど、ミルは本当にアヴァンに詳しい。まえに住んでたらしくて、細い裏道まで知ってるほどだ。当然あたしたちの付け焼刃の知識なんて、足元にも及ばない。

あの調子で、他のこともやつてくれるといいのに。

そう思つほど、これだけは見事だった。

まあだからといって、かき回されない保証はないのだけど……。

「ルーフェイアがそこまで言つなら、彼女も連れていった方がいいんだろうな。

そうするとあとは、誰か上級隊から一人……」

言つてシルファ先輩が考え込む。

確かにこの人選、間違えると大変だ。あたしたち下級生はともかくとして、一緒に仕事を進める相手との相性が悪かつたりしたら、できるものまで失敗しかねない。

けど、ロア先輩はまだ資格がないし……。

「

「エレーナアあたりが、いいかもしれませんね」
黙つてしまつたあたしたちに、タシュア先輩が言った。

「エレーナア？ 春に私たちと一緒に合格した、彼女のことが？」
「他にこの学院に、エレーナアという名の生徒はいませんよ。」

若干15歳で、経験はやや不足ですが、彼女なら上級隊の中でも優秀な部類に入るはずです、「

タシュア先輩、自分もいとおつ同じ年なのは棚に上げて、冷静に指摘する。

でも、言つていいことは間違つてない。

上級隊は普通の傭兵隊と同じで、受験資格は「満15歳以上」。でも実際には、この年で昇格するのは至難の技だ。

だけどその離れ業をタシュア先輩とエレニア先輩、やつてのけている。

いろいろ事情がありすぎるタシュア先輩はまだともかく、学院へ来る前はまあ普通にしてたらしにエレニア先輩は、つまり相当優秀つてことになるだらう。

「在学生に回つてくる任務では、教官に相手を頼むわけにはいきませんし、主だったメンバーは今回の建国祭に出ていますし。

彼女なら女性ですから、クライアントの意向にも沿つてしまつ

「 そうだな」

シルファ先輩がうなづく。

あたしもこの話は、けつこう嬉しかった。ロア先輩ほどじやないけど、エレニア先輩のことはよく知つてゐる。文句なんてあるわけなかつた。

「えつと、じゃあ、あたし……訊いてみます。ロア先輩に聞けば、どこにいるか、すぐわかりますから」

「いやでも、そのくらいは自分で頼まないと……」

シルファ先輩、意外とこうこうとこはきつちつしてゐみたいだ。

「あ、そしたらとつあえず、ここまで来ていただいたら……どうで
しょう? シーモアたちに知らせるついでに、探してきます」
あたしがこう言つと先輩、少し困ったような表情になつた。とな
りのタシュア先輩を気にしているみたいだ。

けど銀髪の先輩は、黙つたままだつた。シルファ先輩がどうする
か、面白がつているらしい。

しばらくして、やつとシルファ先輩が言つた。

「やうしたら……頼んでもいいか? 細かいことは全部、私から説
明するから

「はい!」

いつも面倒をみてもらつてばかりだから、先輩の役に立てるなん
てすごく嬉しい。

「のまま寮でロア先輩探して、そのあとみんなを集めねばすぐだ
る。それからもつ一度詳細を詰めれば、けつこう早いうちに出発
になりそうだ。

そんなことを考えながら、あたしはみんなを探しに出た。

ロア先輩はすぐに見つかった。今朝言つていたとおり、部屋で魔
視鏡の改造をしていたのだ。

「あ、ルーフェ、ちょうどいいところ。ちょっとそつちの石、取つ
てもらえる?」

「これですか? いつたい何に……?」

「うん、ちょっと交信速度、上げられないかなってね

下がらないといいけど……。

魔視鏡は、魔法の呪文の要領で行動パターンを幾つも書き込んだ石を、何種類も組み合わせて動かす。とうぜん石と書き込まれた手順が多ければ多いほど、出来ることは多くなる。

ただいろいろと石によつて特徴があるし、手順も組み合わせを間違えると逆効果だ。だから、上げるつもりが下がつた、なんてことも多かつた。

そんなことを思いながら見ている間に、ロア先輩、手際よく組み上げてフタを閉める。

「さ、これで上手く行けば、やりやすくなるはず」

「そうですね。 つて、いけない」

うつかり大事なことを、忘れるところだつた。

「ロア先輩、エレーナ先輩……どこにいるか、知りませんか?」

「エレーナ? 今日は診療所の手伝いって言つてたけど……どうかしたの?」

不思議そうなロア先輩に、簡単に事情を説明する。

「なるほどね。でもルーフェなら大丈夫だよ。
じゃあこっちも一段落したし、一緒に捜しに行つてあげようか?」

「あ、はい、助かります」

ほんと、ロア先輩は頼りになる。

2人で急いで部屋を出た。

「準備とか大丈夫? いろいろあるつて、エレーナがよく言つてるけど」

「いちおつ……慣れてますから」

太刀一つで戦場、なんていうことまであった。それに比べれば、

準備ができるだけマシだ。

「そつか、でもそれだけよねえ。ほんとルーフH、すげーことに困ったんだねえ」

そんな話をしながらロア先輩と歩く途中、食堂の前であたしは思いついた。

「あの、先輩、食堂……寄つていいですか？ なんかシーモアたち、いるような気がして……」

「うん？ いいよ、行つといで。そしたらその間に、ボクはエニー ア呼んでくるからさ。」

シルファ先輩の部屋へ、直行でいいのかな？」

「はい」

じゃね、そつ言つてロア先輩は、すぐ向こいつの診療所へ歩いていく。

あたしは折れて、食堂へ入つた。

いつものメンバーはすぐ見つかった。予想通り奥でおやつを食べていたのだ。

なんでこんな時間に食事するのかは、わからぬのだけれど。

近づくと、先にシーモアが声をかけてきた。

「ルーフェイア、もう先輩との話は終わつたのかい？ ビジやら泣かされなかつたみたいだけど」

「そんないつも……泣いたり、してないもの……」

あたしの言葉に、みんなが笑いだす。

「だつてルーフェイア、よせばいいのにいつもわざわざ、タシュア

先輩の所へなんか行くんだもの」

「けど先輩、いい人だから……」

「はいはい。で、もう時間空いたのかい？」

それならどこかへ出よつか、そつシーモアが視線で訊いてくる。

「ごめん、それが、すごいことに……なつちやつて。えつと、さつき先輩に呼ばれた話、なんだけど……」

それからかいつまんで、話の内容を説明した。
とたんにみんなの表情が輝く。

「ふうん。じゃあそれに、あたしたちも付き合ひわけだ

「あ、えつと、イヤならムリには……」

「そんなことないわよ。楽しそうじゃない？」

「そうそう。任務なんて、カッコいいよね~」

シーモアはともかく、ナティエスとミル、分かつてゐるんだろうか
？ ちょっと不安になる。

でも、この2人にもうつた方がいいのは確かだし……。

「それでね、シルファ先輩……部屋で、待つてるんだけど……」

「あ、そうなんだ。じゃあすぐ行つたほうがいいね」

シーモアが立ちあがつた。ミルとナティエスも、急いでケーキを
食べ終えて席を立つ。

「いつ出発なんだい？」

「それはこれから、決まる……かな。それより多分、いろいろ準備

……あると思づ」

「そうだよね。まさか手ぶらってわけには、いかないし」

連れ立つて食堂を出た。

あまり声が大きくならないように気を付けながら、みんなで話し
ながら歩いていく。

「アヴァンか~。あたしもう、2ヶ月くらい行つてないな~」「え、そんなに行つてるの?」

そういえばミルって寮生活じゃないから、休みの日にどうしているのか、あたしたちそれほど知らなかつた。

けど「もう」「2ヶ月くらいなんて彼女、よほびアヴァンに縁があるんだろう。この点だけは心強い。

他が心配だけど。

そうこうするうち、あたしたち女子寮の2階まで来た。さすがになんとなく気圧されたんだろう、ナティエスが黙る。もつともミルは相変わらずだ。

「ねえねえ、それで“くらいあんと”つて~?」

「もう、それをこれから、シルファア先輩に訊くんじゃない」「こんなことを平氣で言つちやうんだから、ミルの神経つてどうなつてるんだろう?」

半分呆れながら、シルファア先輩の部屋の近くまで行く。

あれ?

遠目に、ほんの少しじドアが開いているのがわかつた。
もしかしてあたしたちが入りやすいように、開けておいてくれた
んだろうか?

とかすかに話し声が聞こえた。

さて、私は行きますね。
タシユア……。

私がこると余計なことを言つてしまつて、それにヒューイアはいづらいでしょうからね。私の意見よりも、全員で意見を出し合つてよく考えなさい。

先輩たち……。

「どうしたの？」

立ち止まつてしまつたあたしに、みんなが声をかけてきた。

「あ、ごめん。

あのね、えつと、みんな武器、もつてる？ いちおう先輩に、見てもらつたほうが……」

「言われてみればそうだね。じゃあ先に部屋へ戻つて、取つてこようか」

シーモアたちが納得して、いつたんこから離れた。

よかつた。

とつさだつたけど、いい言い訳だつたと思つ。

2人で話しているところにみんなで押しかけたら、迷惑なことこのつえなしだ。

そしてあたしは、先輩の部屋へと向かつた。先に行つて、すぐミ

ルたちが来るのを、伝えておこうと思ったのだ。

ほんの少し開いたドアに、手をかけかける。

あ。

「シルファ」

タシュア先輩が、ダガーを手渡す。

「持つていきなさい。それなりの物ですから、役に立ちますよ」

たったそれだけだけど、どれだけシルファ先輩のことを思つてゐるかすごく伝わってきた。

涙がこぼれそうになる。

絶対この任務、成功させないと……。

そうして立ち去へしていると、不意にドアが開いた。

「ルーフェイア、こんなところで何をしているのですか」

いつもと同じ声と表情。

でも……。

「先輩」

「なんです」

どうしても、言わずにはいられなかつた。

「きっと、きっとみんなで、戻つてきますから」

「失敗するなどとは、思つていませんよ」

これは、シルファ先輩への信頼だらうか？
あたしが意味を計りかねている間に、銀髪の先輩は立ち去つた。

Episode : 12 任務

Ruffer

シルファ先輩から話を聞いた4日後、あたしたちはアヴァンにいた。アヴァンシティ郊外のとある邸宅で、クライアントと顔合わせ、ということになっていたのだ。

ケジケンデイクからこの日程つて、かなりの強行軍だ。

アヴァンでは、首都のイグニールからなら、わりとすぐだ。海を渡れば翌朝には着く。

ただ学院のあるコリアス国、大陸国家なのもあって、ケンデイクから首都までが遠い。ふつうのペースで行つたら、3日はかかる。それをどこかへの宿泊なしでひたすら移動して、2日ほど短縮した。

でも緊張してるみたいで、シーモアもナティエスも、疲れたようすは見せてない。

「ふむ、これがシエラ学院がよこしたメンバーか」
クライアントの第一声は、それだった。

「子供ばかりではないか？ これで本当に、ローウェルの警護など勤まるのかね？」

「お言葉ですが、シエラ学院の傭兵隊の優秀さは、アヴァンの方ならよご存知ではありませんか？」

思わずむつとしていたあたしたちの気持ちを、エレーナ先輩が代弁した。

「それに普段でしたら、私たちもこんな幼い子たちを、危険な任務に連れ出したりしません。ですが今回は、そちらの要望に従いまし

たので」

見事な切り返しに、クライアントのおじさんが黙る。毒舌で知られるタシュア先輩と、いい勝負かもしない。

「……私を、誰だと思っているんだ？」

「アヴァン神聖帝国の末裔、現アヴァン公国王太子、エイヴリー＝ホルスナー＝ド＝ファレル卿と伺っておりますが。違いましたか？」

やつと言ったクライアントの胸騒にも、エレーナ先輩は一步も引かなかつた。

けど、このまま放つておいていいんだろうか？　あんまり険悪になると、あの任務に響きかねない。

(先輩)

シルファ先輩の上着の裾を、そつと引っ張る。
(止めた方が、いいんじゃないでしょうか？)
(そつは思つが、いつたいどうやつたら……)

確かにそうかもしれない。こんなやりとりに口をだすの、誰だつて願い下げだ。

でも、このままでわけにはいかないだろ？しそう。

その時、うまい具合にドアが開いた。エレーナ先輩とクライアントとのやりとりが止まる。

「父上、お呼びですか？」

ひとりの少年が入ってきた。

年は、あしたちより少し上だるつか？　赤みがかつた茶色の髪に、薄い水色の瞳をしている。

たぶん彼　おそらく名前はローウェル　が、今回の警護の相

手なんだわ。

でも、ほつとしたのはつかの間だった。

「ああ、例のシエラの連中ですか。女性ならと思いましたが、やはり野蛮そうですね」

そう言いながら、殿下があたしたちを一瞥する。

一瞬あたしを見たような気がするけど、それを気にしてる余裕はなかつた。みんなが、言われたことに怒つてるのが分かる。シーモアなんて相手がクライアントじゃなかつたら、まちがいなく殴り倒してやるだろ!」

「こずれにせよ、ト々のしかも孤児の集団では、仕方ないんでしょうね。

まあともかく、あまりみつともない真似だけはやめてもらいますよ。」こちらの品位に関わりますから

「この少年、お父様より凄いかも知れない。

見ればみんなは切れる寸前だ。でもさつきだつて止められなかつたのに、どうやつたらいいんだろ?」

そこへ、ミルの能天気な声が響いた。

「ふうん、じゃあ殿下つても、血が青かつたりするんだ~?」

ふわりとあたしたちの前へ出で、とんでもないことを言い放つ。

「な、なんだと……」

「え? だつてそうじゃない 上の人たちつてあたしたちとちがうんでしょ~?」

そしたらさあ、血の色が青かつたりとか、実は目がもうひとつつたりとか、するんだよね?」

無邪気な毒舌……とでも言つんだらうか？

ここにしながら言つ様は、まるで小さな子が尋ねてゐるよつだ。それなりに、しつかり相手の急所を突いてゐる。

「おつもしろいよね、あたし初めて知つちやつた」「この親子が相手じや、どうなるか。でもミル、そんなことまつたくおかまいなしだつた。

「ゆ、由緒ある我々を、まるで化け物のよう」「…」

「あれ？ ちがつたんだ？ んじゃあたち下々といつしょ？
へえ、そつかあ」

ある意味、タシユア先輩以上かも。

「けどさあ、あんまり言わない方がいいよ。これでみんなに嫌われちゃつたりして、任務がうまくいかなくて、死んじやつたりとかしてさーでも、自業自得だもんね？」

とどめの一言。

さすがのクライアントも、今度ばかりは黙つたままだ。なにしろミルの言つてること、あれでも一理ある。

「でさ、あたしたちもう、行つていいんだよね？ だつて顔合わせ、おわつたんだもん
ねえ、みんな行こ。あ、お部屋まで誰かつれてってくれるんでしょ？ テキトーに決めちゃつてもいいけど」「あたしたちも含め、部屋にいた一堂全員、睡然とするばかりだった。

その中をミル、せつとて部屋を出でいく。

「ねえほら早く。お部屋決めて、ゆづくつしょりなおー
部屋を決めるつい、ホテルじゃないと酔ひせん……。
ともかく完全に、みんなミルのペースに巻き込まれてた。勢いに
引っ張られるようにして、あたしたちも部屋を出る。

「あ、ねえねえ、そこの執事さん。あたしたちシトラ学院から任務で来たんだ。

「でね、お部屋、どこに行つたらいいの～？」

天衣無縫も「こまでもくると、そうとうの威力だ。呼びとめられた執事？ も、不審に思うより先にミルの質問に答えてる。

「シトラ学院の皆様ですか？ 少々お待ちください。すぐにドク案内しますので……」

「ありがと～」

なにがなんだか分からぬまま、気が付くとあたしたちは、割り当てられた部屋にいた。

ちなみに由緒正しい家柄なだけあって、調度品なんかはどれも一級品ばかりだ。

「この続き3部屋を、どうぞお使いください。それからなにか御用があるりでしたら、こちらの呼び鈴を……」

「はい　じゃあまたよろしくう～」

ミル、ワインクひとつで執事？ を追い出す。

あまりの展開に、みんなしばらく呆然としたままだった。しばらぐしてからようやく、シルファ先輩が口を開く。

「今のうちに……こりいろ点検した方がいいんだろうな……」

「そうですね……」

才媛で知られるエレーナ先輩も、やつぱりいつものペースがない。

「ええと……ともかくお嬢さんたち、荷物出してみて。せりミル、妙なことをするんじゃないの」

「今うちに……こりいろ点検した方がいいんだろうな……」

「そうですね……」

才媛で知られるエレーナ先輩も、やつぱりいつものペースがない。

「ええと……ともかくお嬢さんたち、荷物出してみて。せりミル、

妙なことをするんじゃないの」

エレーナ先輩、ロア先輩以上に面倒見がよさそうだ。あたしたちの荷物を、ひとりひとり点検していく。

「シーモアは問題なさそうね。ルーフェイアは……」それだけ？

「はい」

あたしはほとんど、荷物は持ち込まなかつた。着替え以外は武器と、自分用にアレンジしたツールキットだけだ。

「驚いた。これで済ませられるなんてあなた、じつは慣れてるんじゃない？」

エレーナ先輩、鋭い。

あたしがシユマ一の人間で尚且つ戦場にいたことは、知っている人はみんな黙つてくれてるけど、これじゃばれてしまいそうだ。

どうしよう。

今までだつて学園長やらロア先輩やらタシュア先輩やら、そういう知られてしまつてゐる。これ以上知られたら、学院を退学することになりかねない。

「ええと、その……」

どう答えていいのか困り果てて、あたしが口籠もつていると、横から助け舟が入つた。

「エレーナ。こみ入つたことには、立ち入らない方がいい」

「こみ入つたこと、ですか……？」

まだどこか訝しげなエレーナ先輩に、こんどは嬌声が振りかかる。

「せんぱい～、そんなのいいから、あたしの、あたしの～～！」

ミル……。

けどこれ、もしかしてわざとやつてくれてるんだろうが？

ともかくこの騒ぎで、ヒレーラ先輩の注意がミルへ移った。

「はいはい、しょうがないわね……なにこれ。なんでこんなに、お菓子が入ってるのよ」

「先輩もどーぞ」

お菓子つて……。

それにしてもミルのこのペース、太刀打ちできる人間いるんだろうか？

彼女を連れてきたの、間違いだつたような気がしてくる。でも彼女ほどアヴァンに詳しい子は、そうそういないし……。

ともかく大騒ぎをしながら、30分ほどでチェックを終えた。

「シルファ先輩、どうやら問題なさそうです。余計なものを持ち込んだ人がいましたけど、不足はありません」

「ふう」

まさに絶妙のタイミング。ミルのブーリングに、思わずみんな笑い出す。

「すねるんなら、持つてくるんじゃないよ」

「ひつじおい、どうせみんな一緒に食べるくせに。いいもん、あげないから！」

あげないって、いつたいいつ食べる気なんだらう？
ともかく、付き合つてるとひたすら話が進まない。だからあたし、自分で訊きたかったことを切り出した。

「あの、シルファ先輩。この後のスケジュールつて、変更……ないんですか？」

「今のところは、そうだな」

「 そうですか。えつと、そつあると……？」

ざつと頭の中で、覚えているスケジュールを点検する。

クライアントとの顔合わせは、無事（？）終わった。あとは今夜、先輩たちが警備担当と直接会って詳細を詰めて、明日から本格的な警護だ。

もつとも建国祭までだから、1週間くらいだけだ。

当然だけどこの建国祭、アヴァンの年中行事だ。で、そのたびにシーラから傭兵隊が派遣されてる。ただ今年は革命派（？）がうるさいらしくて、急遽「開催前も」ということになつたらしい。

しかもなんだか子弟の方まで危ないとかで、あたしたちが追加で雇われることになつたと、シルファ先輩は言つていた。

それにしても。

アヴァン政府つてそんなにお金あるんだらうか？ 余計なことだけ、ちょっと心配になる。

シーラの傭兵隊は、案外単価が高い。世界中に散つてるシユマーの傭兵連中を適当に雇つたほうが、間違いなく安上がりだろう。まあ他所のことだから、考えたつてしまふがないんだけど……。

「先輩、間違いなく武器を、学校へ持ちこめるんですよね」

「ああ、大丈夫だ」

シルファ先輩がきつぱりと答えて、シーモアがほつとした表情になる。

「それ聞いて、安心しましたよ」

見れば彼女、もう武器の手入れを始めた。わりと新しい型の短銃と、投擲用のナイフが並べられてる。

シーモアはスラム育ちのせいか、小回りの効く武器が好みで、格闘とナイフと短銃とをうまく使い分ける。ついでに言つと手元にあるものならなんだつて武器にしてしまつから、相手にすると予測がつかなくて、けつこう大変だった。

「あ、あたしも~」
なにが「あたしも」かは分からぬけれど、ミルもバッグから武器を引っ張り出した。

「それ、ふつうの小銃じゃない……よね?」

「あれ、ルーフェ知らない? これね、かなりの数連射できるヤツなんだ。試作品、ちょっともらってきてきちゃった~。
あ、でもね、いつもの小銃も持ってるよ」

「……」

ミルって……本当にわからない。

なんだか頭痛を覚えながら、あたし今度は後ろへ振り向いた。

「ナティエスは?」

「あたしは、舐いどいたもの。でもいちおつ、見といたほうがいいかな?」

彼女も武器を取り出した。あまり見かけない、諸刃の手のひらサイズの刃物だ。

たしかあたしの太刀と同じで、東方でよく使われたもので、苦無つて言つたと思う。こういった隠密行動にはシーモアの武器と並んで、かなり有効だらう。

「ほんとは毒塗つとくんだけど、まだいいだらう~」「
ナティエスも見かけによらず凄いところがある。そういうえば、彼女これで、スリの名人だとも聞いたし……。
もしかして芸が無いの、あたしだけなんだろうか?」

ちよつと、シラックかも。

なんとなく落ちこんでいると、Hレニア先輩があたしたちに声をかけた。

「はいはい。じゃあみんなHリで武器の手入れをして、そのあと食事にしましょうね。

先輩、これでよろしいですか?」

「ああ、すまない」

リーダーのシルファア先輩が短く答えて、夕方の行動が決まる。

「あ、じゃあ、みんなで食べにいこ? あたしね、いいお店知ってるから~」

「……ねえミル、もしかしてあたしあお金、あてに……してる?」

ミルのはしゃぎぶりにイヤなものを感じて、聞いたとしてみる。

「そりゃ もひるん。だってルーフュイア、お金持ちじゃない あたしたちが高級レストランでちょっと食べたって、どうってことないでしょ~」

「それは……そう、だけど……」

けど、なんか毎回おじらかれてる気がする。

「はいじゃあきまつ~ や、どうこにしようかな~」

当然だけど、ナティエスもシーモアも止めてくれない。それどころか彼女たち、一緒になつて地図を見てる。

「Hレニア先輩、止めてください!」

「あら、いいじゃない。どうせ学院からも経費が出るんだし。それに自由に外へ出られるの、きっと今日だけよ?」

「そういう問題じゃ……」

確かに警護が始まれば、自由な時間なんて殆どなくなるけど、だからって……。

それにいくら経費が出ると言つたって、そんな高いところで食べたら全額はムリだ。そのとき誰が差額を払うのか、あんまり考えたくなかった。

「シルファ先輩！」

最後の頼みの綱で、黒髪の先輩の方へ振り返る。

「私は、食べられればあとは、気にしないが」

「先輩……」

結局その日は、許可がでたこともあって、町の下見と称してみんなで外へ食べに出た。

Nat t i e s s

なにあれ！

これ、あたしの殿下とやらを見たときの、第一印象。

何考えるか知らないけど、あたしたちつかまえて「野蛮」だなんて。いつたいどこに目がついてんだろ？

けどそつかと言つて、任務手抜きするわけにもいかないし。

ただ任務 자체はそれほど、難しくなかつたのよね。24時間の警護だつていうから、もうちょっとハードかと思つてたんだけど、わりとたいしたことないの。

朝起きてガツコ行つて、あたしたち4人が同じクラスでまあくつについてて、あとは帰つてきて周囲固めてるくらい。

夜も3組2人で3時間づつ交代だから、思つたより楽。もつともいちばんやな時間は、ルーフェイアとシルファ先輩が、買って出てくれたんだけど。

それにしても授業、学院以上につまんないし。

あらう。

またルーフェイアが、お嬢さんたちにからまれてる。

あたしたちもそうだったから、あんまり人のことは言えないんだけど。ともかくあの子つて立つせいが、どうもいじめられるみたい。

「シーモア、行こつか？」

「ああ」

2人で席を立つてみて。

行つてみるとお嬢さんたちが、なんやらかんやらルーフュニアを中傷してたの。しかも彼女つたら、優しいから言い返しもしないじ。

「あんたたち、それつきやすることないのかい？」

「一ゆー権力を嵩にきたようなことが大つ嫌いなシーモアが、いきなり辛辣な言葉をぶつけて。

「貴族だかなんだか知らないけど、ガツンの勉強も口クに出来ないくせに、エラぶるんじゃないよ」

「あらシーモア、頭が悪いからこいつこいつとするのよ。お利口な人はこんな真似、しないでしょ？」

あたしもこ一ゆーのキライだから、つい口調がきつくなっちゃう。けどほんと、この人たちバカなのよね。あたしたちがとっくの昔に終わつたような内容で、頭ひねつてるんだもん。

ついでに言つと、体育なんかも呆れるほどダメだし。

「ど、どこの馬の骨ともわからない人に、そんな風に言われる筋合
いありません」

「そうですわ。何より私たちは由緒ある、神聖アヴァン帝国から続
く血筋なんです。いつしょにしないでください。」

だいいちあなたたち、まともなアヴァン語も使えないじゃないで
すか」

「それで？」

お嬢さんたち、ほんつどバカ。シーモアがこんなので、動じるわ
けないじゃない。

「言葉が出来ればエライってなんなら、ビレジやの言語学者の方が上だ
うひね。

血筋？ それがどうしたのさ。2000年も遡りや、あんたたち
だって馬の骨じやないのかい？」

うーん、いつ聞いてもさすが　このキレがいいのよね。
ちなみにお嬢さんたち、絶句。
ちょうどいいから、あたしも乗つてみたりして。

「シーモア、その辺にした方がいいよ。」お嬢さんたち口で言つ
わりには、”庶民の”あたしたちと同じにしか、喋れないみたいだ
もの。

適当にしてあげないと、きっとショックで心臓麻痺おこしちゃう

学院の生徒なんてみんな、数か国語喋つてあたりまえなんだけど。
あたしだって、3つや4つは喋るし。ルーフェイアなんてもつとす
ごくて、出来ない言葉の方が少ないの。

「あなたたち、なんの権利があつて 」

「権利？ んなもの、あんたたちだつてないだろ？」

シーモアってば険悪

けどこの面白いイベントも、何かがぶつかるみたいな音が、遮つ
ちゃつたの。

「なんだ？」

シーモアと一緒に、窓から外を覗いてみて。

「事故……？」

見えたのは、学校の壙に突っ込んでる車だった。かなりの勢いだ
つたみたいで、前のあたりがひしゃげてる。

話が聞こえたみたいで、殿下も他の女子も、窓へ寄つてみんなで
野次馬。

「でもなんだつて、こんな場所に？」

そこへ、ルーフェイアの鋭い声が響いた。

「ダメっ、下がつて！ 伏せて！」

「どうしたつ！」

教室の外で待機してた先輩たちが飛び込んできて、一瞬で状況掴んだみたいで、殿下を引き倒して覆いかぶさる。そしてルーフェイアの動きは、もつとすごかつた。呪文を唱えながら、お嬢さんたち突き飛ばす勢いで前へ出る。

「エレメンタル・ブレス！」

誰でも知ってる、でもホントに使える人は少ないレア呪文。ほんの短い間だけど、いろんなダメージをシャットアウトしてくれる。

けど、どうしてこんな呪文？

そのとき、窓ガラスが割れたの。飛び込んできたのは、どう見たつて砲弾が一つ。それがころつと、床に落ちて転がる。気がついたお嬢さんたちが、一斉にパニック起こして悲鳴あげて。

でも。

「不発？」

そうじゃなかつたら今ぐる、大惨事になつてゐるはず。

「今のうちに！」

ルーフェイアの警告。ただ今度はお嬢さんたちも分かつたみたいで、教室の外へ我先に逃げ出して。

「シーモア、ナティエス、殿下を頼む！」

「あ、はい！」

シルファ先輩に言わされて、あたしたち慌てて殿下と一緒に部屋を出る。

「先輩、あそこです」

「そぞらしいな。報告して人を回してもうひめりおつ」
ルーフェイアとシルファ先輩の会話が、背中から聞こえた。
つてよく見たら、殿下青ざめちゃってるし。

「大丈夫ですか？」
さすがに心配になつて訊いてみた。

そしたら、

「お前たち、乱暴すぎるわ……」

「——感想がくるとは、ちょっとと思わなかつたな。ドラマとか
だつたりこいつとか、「どうして私が」とか「君たちは無事か」
って言うの？」

だいいちこいう状況でまで、文句言いつてどうかして
そんなこと考えながら手順どおり移動してたら、向こうから他の
警備の人たちが駆けてきて、あたしたちを取り囲んだ。

「殿下、『無事ですか？』

「見てのとおりだ」

使用人に気弱なことか、見せられないことなのかな？
つきまでの様子はどうやら、殿下がいつも尊大さで答えて。

「屋敷へ戻る。車を用意してくれ。

それから、シエラ学院から来た者たちも、一緒に戻つてもらつ。
そのように手配しろ」

殿下の命令でみんな一斉に動き出して、あたしたち一階の、応接
室みたいな立派な部屋へ通された。

「用意が出来るまで、こちらでお待ちいただけますか？
「分かった」

窓のそばにも、扉のそばにも、コワモテのおじさんたちが並ぶ。
さつきのことがあったから、すごい警戒ぶりかも。

殿下のほうはなんだか、深刻な顔。もしかしたらやつと、どれだけ危ないか分かつたのかな。

そこヘルフェイアたちが入ってきて、殿下が一警して。

「おまえたち、先ほどは痛かったぞ」
「も、申し訳ありません……」

シルファ先輩が謝ってるの見て、また腹が立っちゃつたり。

そりやあ不発だつたけど、もしあれがふつうに炸裂してたら、突つ立つてた殿下はあの世行き。シルファ先輩たちがガバーに入つた状態だつて、大ケガしたかもしれないし。もちろんそうなつたら、先輩たちはケガじやすまない。

そういうこと、分かつてるのかな？

「まあ幸い、不発だつたからな。だが次からはもっと
「不発ではありますん」

殿下の声を、エレニア先輩がさえぎつた。

「そうですよね、先輩？」

「まあ、そうだな。ルーフェイアの魔法がなければ、私たちもケガをしていただろう」

視線がいつせいに、いちばん小さいルーフェイアへ集まる。

「何したの？」

好奇心で訊いてみて。

「あのレア防御魔法、殿下に使つたのは、分かつたけど。でも他に、ルーフェイアつたら何かした？」

けどルーフェイアつたら答えない。「とんでもないこととした」つて表情で、半分落ち込んでうつむき加減なの。

でも代わりに、シルファ先輩が答えてくれた。

「ナティエス、殿下じゃない。ルーフェイアはあの魔法を、砲弾に使つたんだ」

「え？」

意味がわからなくて、あたしもシーモアも考え込む。だつて防御魔法を砲弾つて……意味なさすぎだし。

悩んでるあたしたちに、シルファ先輩が言った。

「二人とも、ああいう種類の砲弾を硬い箱の中に入れて炸裂せたら、周りがどうなるか分かるか？」

「え？ 周りつて言わても……そういう箱の中なら、別に被害とか、出ないですよね」

そうやって爆発させて、爆弾の処理することあるし。

「そうだな。

じゃあ、箱の代わりに砲弾の外殻を、防御魔法で強化したりどうなる？」

「そんなことしたら、箱に入れるのとこっしょで中だけで あつ！」

思わずシーモアとあたし、顔を見合せた。

ルーフェイア、すごすぎ。

あのレア防御魔法つて意外とむつかしくて、ちゃんとダメージ止められるくらいに使いこなせる人って、教官でもほとんどいないの。それに使いこなしても、息止めてられる間くらいしか持たないし、

範囲も小さい子がやつとくらい。しかも一回使っちゃうと、空間の属性バランスが大きく崩れるとかで、同じ場所じゃしばらくの間使えなくなっちゃう。

でも発動してる間は、その効果範囲内なら、ほとんど無敵つてい 魔法だつた。だから昔は、イザつてときに盾や兜にかけたつて言 う。

そんな魔法を、砲弾の外殻にかけたら。

「中の火薬が爆発しても、砲弾自体が炸裂しなきゃ、不発といつし ょつてことか……」

「そういうことだ」

なぜか小さくなっちゃつてるルーフェイアのこと、あたしたち肩 叩いた。

「すごいじゃない、ルーフェイア。おかげでみんな助かつたんだね」「それは……周辺の魔力の条件、良かつたし……砲弾も少なくて、早くから見えたから……」

褒めたのにルーフェイア、ますます小さくなっちゃつてる。

「あと、先輩たち……殿下かばいながら防御フィールド、作つてた し……」

ほんとに彼女、自慢とか自信とかどつかに落としてきた感じ。これだけのことしたんだから、もつと堂々としてればいいのに。これつて言い換えたら、それだけのことをあの一瞬で見抜いて、それがあわせて行動したつてこと。

あたしたち、ぜんぜん気づかなかつたのに。

そして思った。ルーフェイアが少年兵あがりつてことは聞いてた けど、それつて……こういう場所だったんだ、つて。

こんなことが、日常茶飯事の場所。それってあたしでもちょっと自信ないのに、ルーフェイアみたいなおとなしい子には、どれだけ辛かつただろう？

だったらちよつとくら泣き虫でも、しうがないのかも。

「ルーフェイア」「けどわいわいやつてゐあたしたちの間に、シルファ先輩の厳しい声が割つて入つた。

「ひとつだけ、約束して欲しい。一度とこんな」とは……するんじやない」

ルーフェイアが、きょとんとした表情になる。

「何か、問題が……？」

「何か、じゃないだろう！」

シルファ先輩が声を荒げて、あたしたち思わず身をすくめた。

「失敗したら、どうするつもりだつたんだ！」

「え、でも、その可能性あつたら、やらないです……」

ようするに、ぜつたい間違いなつて判断したからやつた、つてことみたい。その辺はさすが、少年兵あがりなだけあるかも。けどシルファ先輩は、納得しなかつた。

「それでもダメだ！ 自分の身を、危険に晒すんじゃない！」

「危険？」

なんだか話が噛み合つてない。それに先輩、かなり怒つてる。

「おまえたち、私の前で何をやつてゐる」

さえぎつたのは、殿下。

やなヤツだけどこのときだけは、殿下ナイス、つて思つたり。やり取りが止まつたもの。

「任務で來ていて、仲間割れをしてくるよつでは困る。

それにそちらの……ルーフェイアと言つたか？ 彼女がやつたことは、仕事としては上出来だと思うがな」

シルファ先輩が答えて詰まる。

あたしたちのやることって、この殿下を守ること。その中には、殿下が危険なときには、自分が身代わりになることも入つてゐる。

進んでやりたくはないけど。

だから、状況見て被害を最小限にしたルーフェイアは、間違つてないわけで……。

「どうか、よく考えたら殿下、ルーフェイアのことかばつてる？ 彼女のことだけ、名前覚えてるあたりも、アヤシイし。

そんなこと思つてたらドアが開いて、帰る用意が出来たつて言われたの。なんでもダミーの車を出して、そのあとふつうっぽい車で、殿下帰るみたい。

「ルーフェイア、だつたな。いつしょに来てくれ」

あたしたち、顔を見合させた。これつてやつぱり……。

「あの、殿下！ あたしは……」

ルーフェイアが反論しかけたけど、殿下つたう聞く耳持たず。

「おまえは私の、ガードに雇われたのだらう？ 職務放棄か？」

「いえ……」

なんか可哀想だけど、いつもひぶつひぶつと言わなければやつたら、従うしかなかつた。

「ルーフェイア、いつしょに行つてくれ」

「はい」

仕方なく、つて感じでルーフェイアがうなづく。

「何かされたら、ちゃんと言つんだぞ。契約外だ」
シルファ先輩、ハツキリ言いすぎ。
もつともルーフェイアのほうは、意味がわからなかつたみたいで、
首かしげてるだけなんだけど。

「おまえたち、少しば口を慎め」
「あ……」
とりあえずJの口は、そのまま屋敷に戻つて、ソンドになつた。

Episode : 22 変化

Ruffer

学校での騒ぎ以降、さすがに屋敷の外へは出ずこすませることになつた。

最初から「うしごれればよかつたのに。」でもおかげで、格段に警護が楽になつてた。屋敷の内外はもともと、常駐の警備の人や、雇われた学院の先輩たちが固めてくれてる。だからあたしたちは、同室と隣室とに別れて、殿下の相手をする程度で済んだ。

「ルーフェイア～、殿下呼んでたよ～」

「え、また……？」

ただこの殿下の相手、なぜかあたしばかり、やるはめになつてしまつている。

「しょうがないじゃん、『指名だもん』

「その言い方、やめて……」

「すいぐ、嫌な響きなんだけど。

もつともミルなんか、通用するわけがない。

「え～、どうして～？　このまま行ったら玉の輿だもん、サイコーじゃない

ルーフェイア、いいな～」

とんでもないことを、面白そうに言つてのける。なんだか目眩がしてきて、無視してシルファ先輩に、呼ばれたことを言いに行つた。殿下に呼ばれたときは、シルファ先輩と二人で付くことになつている。

本当は最初、殿下はあたし一人だけを最初呼んだのだけど、それだとやつぱり心配だ。何かあつたときに、守りきれないかもしけない。

同じように「一人だけは危険」とシルファ先輩も言ってくれて、あたしからもう一度お願ひして、どうにか殿下は折ってくれた。ただ屋敷からは出ないから、最初にくらべれば気楽だった。

シルファ先輩と二人、ドアごしに声をかける。

「あの……何か、ご用ですか？」

許可が出て中へ入ると、なんだか殿下、本を幾つも広げてゐるところだった。

「ああ、来たか。

いまローム文明についてまとめていたんだが、君なら詳しいことを知つてゐると思ったのでな」

「」の数日であたしが歴史 特に戦史関係 にやたら強いことは、殿下に知れてしまっていた。

なにしろうちの家、4000年は続いている。その上殆どの動乱に何かの形で関わつてゐるわけだから、イヤでも歴史に強くなるしかない。

「その、時代にも、ありますけど……。ですけど、ひととおりなら」「こんな資料が出てきたんだ。どう思つ?」

いろいろ、珍しい資料を見せてもらえたのは、嬉しいけど。

歴史があんまり好きじやないらしいシルファ先輩は、とつぐに部屋の隅だ。どこの棚から出したのか分からぬけど、いつもどおり古いお菓子の本を読んでる。

あたしは、殿下が見つけた資料を覗き込んだ。

「ローム末期みたいですね。橋がかかつた直後……え！ これもしかして、ロームから逃れてきた人たちが、書いたものじゃないんですか？！」

「やっぱりそうか。読んでみるか？」

「いいんですか？」

驚いて尋ねると、殿下が資料を差し出した。

ローム末期は、当時の中心地だったローム大陸が、大規模な魔獸雨。何百年かに一度、魔獸が空から大挙して振つてくる現象でほぼ壊滅したのもあって、かなり資料が少ない。ただ周辺国では、こうして時々ロームから逃れてきた人たちの書き残した資料が、見つかることがある。

当然、ものすごく貴重な資料だ。

しかもこれを書いた人は、けつこう事情通だったみたいで、今まであまり知られていなかつたことが詳しく書いてある。

「……てくれないか？」

「えっ？」

殿下には申し訳ないけど、資料に夢中でまったく聞いていなかつた。

「そんなに面白かったのか」

「すみません……」

この殿下、最初の印象と違つて、意外と気さくだ。こんな無礼なことをしても、怒つたりしない。

「別に構わん。

それより先日のこともあつたから、できれば建国祭の間も、警護

を頼みたい。出来るか？」

「警護の追加、ですか？」

確かにあんなことがあれば、そう思つるのは無理もないだろう。でも、あたしに言われて……。

「あの、ちょっと、お待ち下さい」

隅っこのはうで手持ち無沙汰にしてる、シルファ先輩のところへ行く。

「えつと、先輩、今の話……」

「ああ、聞いた。だがここでは答えられないな言いながら、先輩が立ち上がった。

「殿下、今のお話の件ですが、それをするには……」

「細かいことはいい。出来るのか、出来ないのか？」

殿下の言ひ方に、シルファ先輩がちょっとだけ「やれやれ」って顔をする。

「ですから殿下、ここで決められることではありません。私に決定権はありませんし、そもそも依頼がなければムリです。

お父上かどなたか、ともかく学院への依頼をまず出していただかない」と

「つまり、依頼を出せばいいのだな。分かった、父から学院に要請してもいい」

殿下はさうと言つたけど、そんな簡単にいくんだろうか？

派遣を延長したら、またお金が動く。その分はあたりまえだけど、殿下じゃなくて国が払うわけである。

ただ殿下が危険に晒されたのは事実だから、その理由で押せば、通るのかもしれない。

「今から父のところへ行つてくる。

「そうだ、その資料だが、ここにいる間は持つていってもいいぞ」

そう言って殿下は、さっそく部屋を出ていった。

あとがき

新作を読んでくださって、ありがとうございます。いつもどおり、“夜8時過ぎ”の更新です。

この話から少し路線が変わり、本来の?シリーズらしくなります。感想・批評大歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ。

「……やれやれ。わがままな殿下だな」

「今度はシルファ先輩、声に出す。

「いくら気に入つたからといつて、延長はやりすぎだひつこ

「そなんですか？」

最初はあんなに険悪だったことを思うと、『氣に入った』っていうのはけつこう意外だ。

「でも……シルファの傭兵隊を氣に入つたなら、その、いいんじゃ……ないですか？」

そう言つたらシルファ先輩、さつき殿下にしてた表情を、あたしに向けた。何かまずかつたらしい。

「えつと、あの……すみません」

慌てて謝ると、シルファ先輩が微笑んだ。

「いや、別にいいんだ。

それにしても延長となると、だいぶ様子が変わつてくるな

「そうですね……」

建国祭の前までつていう話だから、その後のことはあたしたちは、一切考えてない。

けどもし延長されるなら、スケジュールはもちらん警護のやり方も、かなり変わつてくるだろ？

「建国祭だから……通常とは、違いますよね？」

「ああ」

答えながら、シルファ先輩がポケットから、何かの紙を取り出した。
式典と、それに付随する晩餐会や何かの連続だな

思ったとおり、大変なことになつた。

「中止は……ない、ですよね」

「無理だらうな。この国の面子にかけても、予定通りやるだらう」「やつぱり、と思つ。

何しろこのアヴァン、歴史の古い国で、その分プライドも高い。それがテロ情報で怖氣づいたら、沽券に関わるつてところなんだらう。

「シエラの派遣隊に、いちおう伝えてくる。延長の可能性がある以上、情報だけは入れておかないど。

ルーフェイアは先に、部屋に戻つてゐるといふ

「あ、はい」

言われて戻りかけて、でもあたしは立ち止まつた。

「どうした?」

「いえ、あの、ちょっと……」

もし建国祭の間もとなると、いろいろ準備が必要るんじやないだろうか、そつと思つたのだ。

「派遣が伸びたとして……あの、例えば服装とか……どうなりますか?」

「服装? あ、そうか」

シルファ先輩が、スケジュール表を見ながら考え込んだ。

「この日程で殿下に付くと、最悪……正装が要るな。学院かどこかに、頼まないと」

口ではそういうながら先輩、難しい顔だ。

「 学院じゃ、間に合わないな。田代ちがなわあめん。
仕方ない、殿下か、その父上にお願いするか」

「あの」

勇気を振り絞って、先輩の独り言をたべきつた。

「あたし、あの、やうこひの……心当たりが

「本當か?」

シルファ先輩の問いに、うなずく。

「モノ自体はすぐ出せますし、直すのも2日あればできます。
えつと、だからあの、迷惑じやなければ……」

何だか凄く悪いことをしてゐる気がして、言葉が尻すぼみだ。

「大丈夫だ。むしろ助かる。

無駄になるかもしぬないが、念のために当たつておいてもいれる
か?」

「はい!」

やつと先輩の役に立てた気がして、あたしは弾む足取りで部屋を
出た。

「えつと……

ひひいつ屋敷だと、外へ簡単に連絡が出来ない。ここに備え付け
の通話石や、学院から預かつた通話石なら問題ないけど、連絡先が
なにしのシユマード。まさか正規のルートで、連絡するわけにいか
ない。

「のくんのこと、何か考えておかないと。

「こんなことがあるたびに、連絡ひとつで手間取つてゐるよ」「いや、イザといつとき間に合わないだらう。

ともかくここの人に上手く言つて外へ出よつと、屋敷の中を歩き出す。使用人部屋は、一階の北側にあつたはずだ。

「おや、シラから来たお嬢さまが、こんなところまで何の用です？」

やつと見つけた女中さんが、声をかけてきた。あたしたちのことは、屋敷の全員にきちんと伝えられてるみたいだ。

「殿下のお相手に呼ばれたのでしたら、いかには見当違いの場所ですよ。ご案内しようか？」

前言撤回、ちゃんと伝わつてない。けど、「護衛だ」と訂正すると、もつとやせこじへなりそうな気がしたから、そのままにする。

「あの、やうじやなくて……ちょっと外へ、出たいんです」

「外へ？ それは私には、判断がつきませんねえ」

本当にこいつは、たかが外へ出るだけでも一苦労だ。警備が厳重なのはいいけれど、その分コトがなかなか運ばない。

「先輩から、用事を言い付かつたんです。ダメでしょうか？」

「あら、そういうことですか。でしたらちよつとお待ちくださいね」この人たちも、用事を言いつけられることには、慣れてるからだらう。すんなり納得してくれて、どこだかへ連絡して、専任の人のところへ連れて行つてくれた。

「ありがとうございます、助かりました」「いえいえ。殿下からお嬢さまには、よくすみよつて話こつながられてますしね」

「 もう、なんですか……」

いつたい殿下、何を考えてるんだろう？

不思議に思いながらも、ショマーのまつげ、ムダになるかもしれないことも含めて連絡する。

それから部屋へ戻ると、思つたとおり、みんなが集まつていた。

「ルーフェイア、派遣の追加が決まったわ」

思った通りの言葉で、エレニア先輩が切り出した。

「まだ学院へ要請が出た段階だから、本決まりじゃないけど。でも新規じゃなくて延長だから、ほぼ通るでしょうね」

「そう……なんですか。」

「えっと、そしたら、どのくらいの期間ですか?」

おおよその見当はついていたけれど、一応尋ねてみる。

「建国祭終了までだから、1週間ほどだな」

代わって答えたシルファ先輩の言葉も、思つたとおりだった。

それでも、こんなに簡単に追加が決まって、いいものなんだろうか?

曲がりなりにもシエラからの派遣だ。けつしてタダじゃないはず。

「移動の連続になりそだから、覚悟しておいてね。けつこうスケジュールが詰まってるのよ」

エレニア先輩が、用紙をめくつながら書い。

「明日の夕方のレセプションを皮切りに、式典が日程押しなの。もつとも殿下は全部に出席なさるわけじゃないから、それだけは助かるんだけど」

「そんなに……凄いんですか?」

そう訊くと、先輩が予定表をテーブルの上に置いてくれた。

確かにかなり詰まっている。ほぼ毎日、何かに出席する感じだ。

「先輩、これもしかして……片っ端からパーティーって言いません

？」

妙に嬉しそうな調子で、ナティエスが訊いた。

「やが、言つだらうな

けどよく見てみると、嬉しそうなのはナティエスとヒュニア先輩だけだ。

ミルは平然まあこれはいつもだけじとしたるし、シルフア先輩とシーモアなんて、なんだか嫌がつてゐ感じがある。

「ドレスとか、どうするんですか」

シルファ先輩が、あたしのほうを見た。いま言つていいかどつか、悩んでるみたいだ。

あたしがうなずくと、先輩がちょっとほつとした表情で、ナティエスに答えた。

「いちおづ、借りる当てはある。連絡済みだ」

「あん、買えるわけじやないんだ」

ナティエス……。

公式の晩餐会や何かに、すぐ買えるよつた出来合ひの物を着て行つたら、かえつて目立つのに。

「けど先輩、大丈夫なんですか？ 学院に頼んでも間に合わないって、さつき言つてたじゅありませんか」

「えつと、あの」

当事者じやないシルファ先輩じや、答えられない氣がして、口をはさむ。

「当てがあるので、あたしです」

「あなたが？」

エレニア先輩が、信じられないといふ表情をした。

「まあルーフェイアが言つなら、嘘つてことはないでしょ」ナビ。
「でも大丈夫なの？」
よっぽど心配らしくて、また確認される。

「その、連絡したので……用意は、もうしておはづです。あと日時を言えば、すぐここへ届きます」

このアヴァンの近郊には、小さいながらショマ家の施設がある。しかも本拠地よりずっと交通の便がいいので、あたしをはじめかなりの人数がよくここを利用していた。

そんなわけでショマーの面々が使うための服が、そこにはたくさん置いてある。そしての中には、あたしたち総領家の物も、けつこつあった。

「そんなどぐ、用意できるの？」

「はい」

このくじこのスピードがなければ、戦闘集団の要望には応えれない。

まあ「正装をありつたけ用意して持つてここ」つてのは、珍しい要望だらうけど……。

「ねえ、ルーフェイア」

エレーナ先輩が、鋭く訊いてきた。

「前から思つてたんだけど、あなたいったい、なんなの？ ロアと一人で、何か隠してるでしょ」

気持ちは分かつた。あたしも多分、目の前でこんなことをされたら疑問に思つだらうから。

でも、答えるわけにいかない。

どうしようかと考え込むあたしに代わって、口を開いたのはシルファ先輩だった。

「ヒレニア、疑問はわかるが……この際、いいのではないか？」

「それはそうですけど……」

シルファ先輩の言葉にそう応えたものの、ヒレニア先輩はまだ不満そうだ。とても頭がいいから、曖昧なことが気になるかもしない。

そこへ今度は意外にも、シーモアが口を挟んだ。

「先輩、実言うとあたしらも、ルーフェイアのことは知らないんです。けど、それでいいんじゃないですか？ 彼女は優しくていい子だつてだけで。

だいいちあたしら、殆どがワケありますし」

言外に、これ以上突っ込むのならたとえ先輩でも容赦しないといふものを、漂わせている。

一瞬どうなる」とかと思つたけれど、幸いにもそれはなかつた。

「 そうね」

思うところがあつたらしく、先輩が引き下がる。

「うやつて、どれだけみんなにかばつてもうつただろう？ あたしがみんなに話したことは、ほとんどゼロと言つてい。それなのにみんな、何も聞かないでいてくれる。あたしが曰く付きなのを知りながら、知らないふりをしてくれている。

ありがたかった。

もしみんながこうしてくれなければ、とうの昔にバレて、学院を退学しなきやいけなかつたはずだ。

「 あるだけ、用意したの。みんな好きなの使ってね？」
思わずそう言つ。

「ああ、使わせてもらひつせ。ただあたしとしては、あんまり着たくないんだけどね」「だよね~。シーモア、こゆのあんまり似合ひそひになつたみたい！」

言葉の途中で見事に殴り付けられて、ミルが悲鳴を上げた。

「つたく、見たこともないくせに好き勝手言ひやがつて。後で驚くんじやないよ」

思わずみんなで爆笑する。

でもシーモア、ミルの一言に怒つて嫌いなドレスを着ることにしたみたいだ。

乗せられたつて言ひ氣もするけど。

ただとりあえず、説得しなくてすむのは助かる。シーモアのスカート嫌いは有名だ。

「それにしてもあるだけって、いつたいどのくらいなの？」

「え？　たいした量じゃないけど……でも少しでも、多いほうが多いと思つて……」

やけに期待してゐるナティエスに、そう答えるしかなかつた。いちおうひとおりは揃つてるけど、あくまでも「それなり」だ。だいいちシユマーはもともと戦闘集団で、貴族じゃない。

「ふうん、そう。でもまあいいかな？　滅多に着られないもんね」

「ごめんね、期待裏切っちゃつて」

久しぶりにのんびり、みんなと会話しながらの時間だった。

S y l p h a

「ルーフェイア、これのどこが『大した量じゃない』のよー。」届けられたものを見てのエレニアの一言は、あまりにももつともだった。

部屋が埋まっている。

おそらくクライアント側に頼んだとしても、これほどは用意できないだろ？

ナティエスがやけに嬉しそうだった。所狭しと下げられたドレスの間を縫つようにして、うるりうる物色していた。

「すっごい、お金持ちって違うわね～

そう、言うのだろうか？

詳しく知つているわけではないが、ルーフェイアの場合は、普通に言う上流階級とは何か違う気がする。

「ごめんね、みんな袖、通しちゃつて……。えっと、そっちのサイズ、ナティエスとミル……着られるかも。

シーモアと先輩たちは……従姉と母のが、合つと思つんですけどいちおう母親などと共にしているようだが、それにしても半端な量ではない。

「ほんとうにいいの？　どれも高い生地じゃない。汚したら申し訳ないわ」

エレニアが恐縮する。

「構いません。どうせ部屋で、場所ふさいでるだけで。もしよかつたら、持つて帰つてください」

「持つて帰るつて、あなたねえ……」

「どうもルーフェイアは、あまりこの類は好きではないよつだ。さつさと数着選び出して、終わりにしてしまつてこる。」

「ねえねえシーモア、これ着ていらんよ～」「あ、いい色。似合つよ、きっと」

見れば下級生たちは、向こうで大騒ぎしていた。エレニアも大人びたものを数着、選び始める。

「靴と装飾品も、使つちゃつてるけど、これ……」「ひや～、これホンモノじゃない」

あのミルが驚いた。

だが、それも当然だろつ。ルーフェイアがさりげなく差し出した装身具は、どれもかなりの大きさの宝石類を、あしらつたものばかりだ。しかも手が込んでいる。

「ほんとうに……使つていいのね？」

エレニアが念を押す。

「はい。あと、持つて帰つてください」

どうもルーフェイアの感覚は、ずれているよつだ。

「じゃあ悪いけどレセプションなんかがけつこうあるから……3つ4つ借りるわ。これ、いいかしら？」

「あ、それ、似合いそうですね」
けつこう楽しそうではあるが。

しばらく私が眺めているあいだに、どうやらみんな決まつたようだつた。

「あとはアクセカ。なくさないよつしなくひき」

「これ……あげるけど?」

「えへ、それはまずいよ。だつてこれ、半端な額じゃないもん」

「え、そつなの?」

普通では考えられないような会話が続いている。
価値を知らないのか、それとも慣れすぎてしまっているのだろう
か?

と、ルーフェイアがこちらへ来た。

「シルファ先輩……試着、しないんですか?」

不思議、といった調子尋ねてくる。

「いや、その、私は……」

「……お気に、召さなかつたですか?」

「そうじやないんだが……」

思わず口籠もつた。

実を言えば、スカートの類は苦手だ。制服でさえ着たくない。

いつたいどひ、言い逃れたものか……。

Nat-t-i-ess

もう、ルーフェイアつたら嘘ばっかり。確かに新品ってわけじゃないけど、質のいいドレス、部屋にっぽいじゃない。色もサイズも「ザインも、すついじいたくさんあるの。よつびりみどりで迷っちゃう。

「へへ」

思わずハミングしながら、物色したりして。
どうしようかなあ？ この水色のやつ、似合つかなあ？ ちよつと幾つか選んで、試着してみたり。

「あとはアクセかあ。なくせないよ！」
「これ……あげるけど？」

「うーん。ルーフェイア、マジお金持ち？ かるーく「あげる」と
か言つてるけど、どれもホンモノだし。
そんなこんなしながら、あたしたちみんなで着るもの選んだんだ
けど……。

「シルファ先輩……試着、しないんですか？」

そうなの。エレーナ先輩は素敵なのをいくつか選んでるんだけど、
シルファ先輩、見向きもしないの。

「いや、その、私は……」

しかも先輩、ルーフェイアに訊かれて、なんか困り顔だし。

「……お気に、頃をなかつたですか？」
「やうじやないんだが……」

うーん、これってもしかして、シーモアと同じパートナー……？
よおし

ちょいちょいっと手招きして、シーモアとミルを呼んでみて。ついでにエレーナ先輩も。

「なに、どしたの？」

「うん、シルファ先輩、どんなドレスが似合つかなって」「あの先輩、大人びてるからな……」

4人でドレスの間を移動しながら、選んでく。

「ねえねえ、これどうかな～？」

「ねえミル、先輩つて瞳が紫だから、そういう色の方が似合つんじやないかな？」

「そうしたら……これなんかどうかしら？」

「あ、エレーナ先輩、センスいい～」

結局あたしたちが選んだのは、Aラインのドレス。上半身は藤色で綺麗な刺繡が入つてて、スカートの部分はもつと淡い薄紫。オフショルダーになつてて肩が出るから、きっと着たら素敵だろうな。

アクセサリーは……サファイアがいいのかな？ 金じゃなくて銀色っぽいやつで。

「じゃあこれ、先輩に」

「あ、待つて」

ちょっとだけないしょ話。

「あのね……」

「……？」

「……」

で、作戦会議終了
さて、いきますか？

「
！」

「せ～んぱい 着ないとルーフェイア、泣いたり～」

「え、あ、そういうつもりじゃ……」

案の定、シルファ先輩が慌てる。

「そしたらあ、ちゃんと着なくちゃ～～」

「いや、でも……え？」

ミルに気を取られてるうちに、シーモアとコレニア先輩、シルフア先輩の後ろに回つてたりして。で、当然右腕と左腕つかんで。

「い、いつたい何を……？」

「いひじうことです、」

いいざまあたし、指を動かした。それをと先輩のベルト、外してみたりする。

あたしけつこう、スリの腕よかつたんだから。で、ついでにブラウスのボタンも。当然先輩の素肌があらわになつたり。

「なつ、何をするんだつ！」

先輩、混乱してるし。

「あ～、シルファ先輩ムネおつき～ やっぱり89だあ
ミルが大喜びする。」

「あ……先輩、いいな……」

ルーフェイアもいつのまにか、先輩の前へ来て、羨ましそうに眺めてるし。

つて、あらま。

「……！」

シルファ先輩、凍っちゃう。
まあそうだよね。ブラの上からとほいえ、いきなりムネ触られた
りしたら。

ただルーフェイアは下心とかじゃなくて、単純に羨ましかったみ
たいだけど。

「ルーフェイアするうい！ あたしも触る～んぎや」

「こつちは下心見え見え。でも騒ぐミルに、シーモアのケリ 手
は塞がってるもん ガ決まって一件落着
で、転がってるミルは放つておいて、こつちはまだ一仕事。

「ヒレニア先輩、もうちょっとしつかり抑えててくださいね？ シ
モアもよ？」

「 きつ、着るつ！ 自分で着るから、放してくれ……！」

「えへ、せつかくここまで来たのに……」

「まんないじゃない。

けど横から、ルーフェイアが割つて入つて。

「ねえ……放してあげて。先輩、可哀想……」

泣きそうな瞳でこつち見るの。これじやしじょうがないかなあ？
じつ言つとこつこつめるメンバーで彼女の涙に勝てるの、いなかつ
たりするのよね。

「じゃあ先輩、これどうぞ」

「いや、だから……」

うーん、あたしじやつぱり、まだイマイチかな？
けどいいタイミングで。

「あの、先輩、ダメ……ですか？」

ルーフェイアからもお願い攻撃。シルファ先輩、これに特に弱いのよね。

もちろん今回も、ぱっちり有効。で、先輩が一式着てみて。

「うわあ……」

「すつごおい！」

「先輩……綺麗」

想像以上だつたりしたの。

これなのに先輩つたら、ぜつたいスカートはかないんだもん。もつたひないなあ。

「あ！　いいこと考えた」

ミルが急に、素つ頓狂な声を出して。

「もう、耳が痛いなあ……。で、いい」とつて？

一応は聞かないと。

「あたしね、影写機持つてる。写しとこうよ」

「あ、それいい考え。みんなで撮るうか？」

ミルにしては、すつごいまとも。けどなんで、そんなの持つてきたのかな？

「私は……遠慮する」

「ダメですよ）。それとも先輩……？」

あたしが笑いながら、2歩出たら、シルファ先輩あとずさつちやうし。

「先輩……」

しかもルーフェイア、泣きそつな顔で上目遣いに先輩見るし。

「……わかつた」

で、記念撮影。

[写影出来上がるの、た・の・し・み

Episode : 31 策略

Ruffeir

こんな会場にでるなんて、久しぶりだつた。

立食式の会場は、たくさんの着飾つた人々で賑わつてゐる。

この黒いつぶつぶのつたパン、おいしい

ただ今日は幸いにも、あたしを知つてゐる人はほとんどない。いわばアヴァン国内の内輪だし、一方であたしはごくたまに財界関係に顔を出す程度だから、面識がない人ばかりだ。

殿下には今は、エレニア先輩とミル（！）がついてくれてる。いずれにせよ会場の内外はかなり厳しく警護されてるから、あとは誰かが殿下に張り付いていれば、ほぼ大丈夫だろう。

もつとも油断はできないから、残りのメンバーも遠巻きにするようにして気を配つてはいた。

あ

シルファ先輩の後ろ姿をみつける。ナティエスたちが選んだ薄紫のドレスが、とてもよく似合つていた。

タシュア先輩が見たら、なんて言うだろうか？

あたしだけ綺麗な先輩を見て、申し訳ないような気がする。

「シルファ先輩」

「あ、ルーフェイアか」

声をかけると、先輩が振り向いた。

あれ？

よく見ると先輩、最初にナティエスたちが選んでいたのとは違つアクセサリーを付けている。

銀の鎖にさがる これは水晶だらうか？ 綺麗な結晶の形をしていて、滅多にお目にかかるれないほど透明度だった。

「先輩、そのペンダント……？」

「え？ ああ……そういえば、折角ルーフェイアが用意してくれたのを、付けなかつたな。すまない」

「あれはどうせ、ありあわせですから。

「これ、水晶ですよね？」

近づいてみても、傷ひとつ見当たらぬ。結晶の内部も完全な透明だ。

「ほんなど、困るだけ あるうちのアクセサリーの中にも、これだけ透き通つたクリスタルはあまりないだらう。」「これか？ タシュアが、くれたんだ」

「ええっ！」
思わず声をあげる。

「そんなに、意外か？」

「え、あ、別にその、あつちやいけないとかは……けど、でも……」「どう取り繕つたらいいのか分からぬ。

けどシルファ先輩、そんなあたしを見て笑つただけだった。

「信じられないだらうな

「は……」

あの毒舌によらず、意外にもタシュア先輩が優しいのは、あたしも知つてゐる。けど、まさかプレゼントをするとは思わなかつた。

「誕生日に……もらつたんだ」

そう言ってシルファ先輩が、水晶を握り締める。

不思議な表情。

「つとつとしているのに、どこかに遠い昔の寂しさが混ざつている。」

でも、この学院でこの表情をする人は多い。

孤児故に、何も持たずに育つた。それがこの学院へ来て年数を重ねて、やつと信じられるものを手にして……そんな時にみんな、この表情を見せる。

シルファ先輩も他の生徒の多くと同じように、早くに両親をなくしたと聞いていた。だから多分、学院へ来る前はいろいろ苦労したんだろう。

そのまま幸せになつて欲しいと、願わずにほいられない表情だつた。

「素敵な、プレゼントですね」

「ああ」

そのまま2人で黙つてしまつ。

シルファ先輩はとても口数が多いとは言えないし、あたしもミルやナティエスのようには喋れないのだから、当然といえば当然だ。けど、こうしてるのは嫌いじゃなかつた。手にしているグラスの中身を飲みながら、なんとなく暖かい雰囲気に浸る。

「ルーフェイア、ここだつたのか」

それを破つたのは、シーモアの声だつた。

彼女が着ているのは、銀色のドレス。袖なしで、前合わせのちゅつと見かけないデザイン。誰がこんな作らせたんだろう？
で、身体にぴつたりとはりついている。
髪も結い上げてるから、まるで別人みたいだ。

「なに？」

「いや、また殿下があんたお呼びだから、探しに来たのさ」

「また……？」

どう考へても多すぎないだらうか？

「ともかく、行つてくれないか？ あたしらじや、てんでダメらし
いからね、あの殿下は」

「あ、うん。

えつと先輩、ちょっと失礼します」

「気をつけるんだぞ」

シルファ 先輩の声を背中に、シーモアに先導される格好で会場を横切る。

エレーナ先輩といっしょにいた殿下が、あたしたちを見つけて近づいてきた。

「ルーフェイア、時間はあるのか？」

「あ、はい。殿下のお傍にいるのが、任務ですから」
時間も何も、このためにはいとしか言いよづがない。

「そうだったな。ちょっと一緒に来てくれないか？」

他の者は少し、下がつてもらいたいんだが

「それは承諾しかねます」

エレーナ先輩 ハイネックに、裾だけ広がったデザインのドレス、すごく似合ってる が即座に反対した。

そもそもそうだろう。何かあった時に護衛があたしひとりでは、殿下をかばいきれないかもしない。

でも殿下、そのくらいじやびくともしなかった。

「それならお前たちへの依頼を、解消するだけだ。行くぞ」

こう言われたら、やりようがない。エレーナ先輩が歯噛みをしているのが分かる。

ただその時、田があつたミルがウインクした。そして彼女、小さく手を振る。

「どうか。

いつたいどうしたわけか、ミルはこの会場の構造に詳しかった。
おそらくこいつそり、付いてきてくれるつもりなんだろう。

彼女がどうにかしてくれることを祈りながら、殿下と一緒に会場を歩く。

きらびやかな屋内。

南側の庭に面したこの大広間は、透き通ったガラスがふんだんに使われた。日中はそれに日の光が反射して、とてもきれいだつていう。

ただ今はもう夕暮れを過ぎているから、代わりに無数の灯りの光が反射して、やっぱり複雑に煌いていた。

きらびやかな屋内。

南側の庭に面したこの大広間は、透き通ったガラスがふんだんに使われた。日中はそれに日の光が反射して、とてもきれいだつていう。

でも今はもう夕暮れを過ぎていて、代わりに無数の灯りの光が反射して、複雑に煌いていた。

「それを着てくれたんだな」

「え？ あ、はい」

実はあたしが着てるドレス、自分の持ち物じゃない。いつたいどういう風の吹き回しか、殿下が届けてくれた。

本当を言えれば、それなりに戦闘に耐えるようになつて、自分のものほうがいい。でも殿下の好意を無にするわけにもいかなくて、結局着ることにした。

ただ殿下の持ち物なだけあって、超一級品みたいだ。

形は裾が広がつたオーソドックスなものだけど、トーンの違う薄翡翠の透ける布を幾つも重ねて、花びらみたいに仕立ててある。

しかもよく見ると、似たような色で細かい刺繡までされてるし、宝石も幾つもあしらわれてた。

あしらいすぎて、裾とか宝石、どこかに引っ掛けそう。

もし戦闘になつたら、満足に動けないんじゃないだろうか？ けど自分のじゃないから、切り落としたりできないし……。

「意外と似合つた。死んだ姉のものなんだが」

「あ、えつと、ありがとうございます」

不意に殿下から声をかけられて、慌てて答える。

けどなくなつたお姉さんのものを赤の他人に着せたりして、構わないんだろうか？ 確かにクローゼットの奥で眠らせておくには、もつたないと思つけど。

ときどき周囲から声をかけられては、それに答える殿下の後ろについて、光と彫刻とに彩られた屋内を歩く。

やがて殿下は屋外へ出た。

この庭は広間から簡単に出られることもあって、いくつもテーブルが用意してある。

でもあたし自身は、気が気じやなかつた。

どう考へても屋外の方が、警備は甘い。学校でのこともあるし、こんなところに長時間いたら何が起こるか知れなかつた。

それなのに殿下、テーブルの上からグラスを一つ取ると、奥の木立のほうへと歩いていく。

「殿下、お待ちください。危険過ぎます！」

「少しだけならいいだろ？」「？」

警告しても取り合おうとしない。

「先日のこともあります。せめて屋内へ戻つていただけませんか？」

「それなら、この質問にだけ答えてもらえないか？」

「質問、ですか？ わかりました」

殿下が戻つてくれるなら、とりあえずなんでもいい。

「君は、どこ家のものだ？ どう考へても庶民とは思えないからな。

まあ、アヴァン国内じゃなさそうだが」

「え……」

さすがに答えに詰まる。

なにがあつてもショマーだなどと口に出来ないし、かといって家が所有している財閥 ようはショマーの表の顔 の関係者なんて言つたら、やつぱりややこしいことになるだろ。」

万が一どこから、そんな財閥の子弟が孤児ばかりのMesi・シエラの本校にいるなんて漏れたら、こんなところが大騒ぎだ。

「その……お答え、できません……」

それ以外に答えようがなかつた。

「なるほど、やつぱりワケありか。まあいい、そのうち分かるだろうしな」

そのうちでも分かると、あたし困るんだけど……。
だけじゃつ、口にするわけにもいかない。

「あの、ともかく屋内へ戻りませんか?」

「やうだな」

結局、なんのために出てきたんだろ? ただちにひきこじても、戻つてくれると言うのはありがたかった。
急いで歩き出す。

けど。

かすかに聞こえる、刃と刃のぶつかり合ひの音。そしてそれを上回る、イヤな「何か」。

「殿下……」

そのまま行くのは自殺行為に思えて、急いで殿下を木立の中へ引く。

「どうし」

言いかけた殿下の言葉は、轟音にかき消された。

「な、なんだ?」

「おそらく……爆弾です」

「なんだと!」

慌てて駆け出しあつとした殿下を、制す。

「お待ち下さい、危険です。気になるのは分かりますが……」白毛
へ、戻られたほうが

言いながら、遅かったと思つ。警護の人たちが、あたしたちを取り囲んだ。

「なんだ、お前たち。ちよつといい、家まで……」

「殿下、ダメですっ!」

ふつつの警護役とは、気配が違う。

「……なんのつもりだ

いつせいに銃口を向けた男たちに、意外にも冷静に、殿下が問い合わせた。

「貴様ら、僕が誰だか分かっているんだろ?」

分かつていなかつたら、こんなことはしないんじゃないだろうか?

ついそんなことを思つ。

警護役 どう考へても実際には違つだらつ も、同じことを
答えた。

「分かつていなければ、こんなことはしませんね。さて、我々と一緒に来ていただけますか?」

「あいにく、忙しいんだが

「殿下、いけませんっ！
とつそに制止する。こんな相手に毒舌を振るつたら、下手をすれば殺されかねない。

「ほひ、 いひちのお嬢ちゃんは、 ものわかりがいいようだな
別にそういうわけじゃない。 できればさつさと倒して帰りたいと
こだ。 ただそんなことをしようものなら、 殿下の安全が確保できな
くなる。

なにがあつても、 殿下を危険にさらすわけにはいかなかつた。

考える。

敵の数は……けして少なくない。 いま目の前にも数人いるし、 物
陰に隠れてさらに何人もが、 ひひちを取り囲んではるのが気配で分か
る。

仕掛けられていたらしい爆弾といい、 この人数の警護役が敵に回
つてることといい、 ひひちやら内通者がいたみたいだ。

「お前たち、 なにをするつもりだ？」

いいタイミングで殿下がした質問の、 答えに耳をそばだてる。
「上手く殿下にお会いできたので、 じ招待しようかと思いまして。
『同行願えますか？』

微妙な言い回しだつた。 偶然遭遇したとも、 最初から狙っていた
とも、 どちらとも取れる。

「断つたら、 どうなる？」

「その場合はここで、 お休みいただくことになりますね。

もつともあの爆発を首尾よく回避された殿下なら、 そんな愚かな
ことは、 なさらないと思いますが」

危険だ、 と思う。 いの言い方から見るかぎり、 いの敵は殿下の生
死を、 さほど気にしない。

首尾よく攫えればOK、ダメなら亡き者に、といつとこいだらう。応援も、期待できそつになかった。包囲網が厚くて、先輩たちがここまで突破できるとは思えない。それどころかあの爆発どう考へても会場は大惨事に、巻き込まれた可能性もある。

殿下の身の安全のためににはけつきよく、こゝは従つしかなさそつだった。

でも、ひとりで行かせるわけには……。

「さ、ご同行願えますか？」

銃口は向けたまま、男たちが殿下を両脇から挟む。

「リーダー、この嬢ちやんはどうします？」

「喋られたら困る。始末しておけ」

思つたとおりの展開だ。

ここからどう、上手く持つしていくか、それを必死に考える。

「その子を、殺すのか？」

「殿下には関係ないことかと」

答える男に、殿下が意外なことを言った。

「彼女はコリアスから招かれている。下手に手を出せば、国際問題だぞ」

「……」

こゝの脅しは、効いたみたいだった。どこの誰かは分からぬけど、さすがに外国とはコトを構えたくないらしい。

「やむを得ん、お嬢ちゃんも一緒に来てもらおう」

男の言葉に黙つて従つ。殿下の機転で付いていけるのだから、文句なんてなかつた。

でも、全く何にもせずに、連れて行かれる気はない。男たちに氣

づかれないように呪文を唱えて、放つ。

殿下を巻き込めないから誘拐犯相手には使えないけど、魔法の使い道はそれだけじゃない。

呪文が発動して、虚空に稻妻が閃いた。これを見れば、先輩たちは何か起こったことは、分かつてくれるはずだ。

「な、なんだ？」

瞬間明るくなつた辺りに、男たちが慌てる。

「わからん、だが急ぐぞ！」

短銃を突き付けられたまま あたしにはあんまり意味がない
追い立てられるように暗い庭園を横切つて、塀のところまで来る。
驚いたことに柵の一部が門になつていて、出入りが可能だつた。
なにがあつたときのために隠しでつくれられたのだろうけど、これが
今回は裏田に出たみたいだ。

暗いうえに、二門の向こうも木々が茂つていて、見通しはあまり
よくない。けびじうにか、車が停められているのを確認する。

それにしても。

さつきも思つたけど、やっぱり内通者がいたらしい。そうじゃな
きゃこんな場所の隠し扉、部外者が知つてるわけがない。

「過激派」って話でここへ来たけど、アヴァンの内部事情は、か
なり複雑みたいだった。

何かの手がかりになるかもしれないと、男たちの話を聞き漏らさ
ないようこする。

「ほんとにこのまま、殿下とこの子を連れて行くのか？」

「田撃者を放つておくことは出来ん。

まあ、少ししてから死体を放り出す。そうすればアヴァンの手
落ちだと、コリアスが責め立ててくれる。好都合だ

なるほど、と思った。

どうもこの過激派、アヴァンがコリアス ショラの本校があるあたしたちの国 と対立する」と自体は、むしろ嬉しいみたいだ。ただそれには、少し長引かせて騒ぎを大きくしてからのほうが、確実つてことなんだろう。

何か特定の思想で動く集団が、騒ぎを起こしてゐるだけって思つてたけど、もっと大掛かりな組織みたいだつた。

いろいろ考えながら、ともかく当分は、おとなしくしておくれ」とに決める。

今のあたしの強みは、ふつつの女の子と思われることだ。彼らはあたしが戦えるなんて、夢にも思つてない。

この勘違いを、利用しない手はなかつた。

「予定通り白い森へ向か'づれ。 もう乗るんだ」

この部隊? のリーダー名乗りじこ男に、車へ押し込まれる。

「この子に乱暴なことをするな。骨でも折れたらどうする気だ」

「殿下、立場が分かつてらつしやらないようですね」

言葉とともに、銃口が向けられる。
けど殿下は、微動だにしなかつた。

「生かしておいたほうが価値があるから、攫うのだろう?

それに僕に手を出せば、この国の世論は一気に動く。やつなつたら困るのは、お前たちのほうだと思つが

この殿下、思つてたよりもずっと、肝が据わつてゐる。それに自分の価値がどこにあるかも、それがどう利用できるかも、ちゃんと把握してゐる。

ちょっと見直した。

まあそれでも、いざ脱出となつたら、役には立たないだらうかと
……。

「まつたく、口の減らない殿下だ。まあそれも、いまのつかだらう
が」

男が言いながら、前の席に乗り込む。
「尾けられていらないだらうな。よし、出せ」
闇の中を、車が走り始めた。

S y l p h a

ルーフェイアが行つてしまふと、急に周囲が寂しくなつた。華奢で纖細で泣き虫だが、あの少女には華がある。

そのあたりのテーブルからグラスを取つて、さりげなく辺りを見回していると、声をかけられた。

「いつしょに踊つてもらえませんか?」

「すまない、失礼する」

それだけ言つて場所を変える。

育ちの良さそうな貴族の子弟たち。殿下もそうだが、自分の力で得たわけでもないのに「権力」というものを振りかざして、平然としている。

だが彼らから地位と権力を取つたら、恐らくなにも残らないだろう。

つまらない、な。

実力の伴わない力など、所詮は付け焼き刃だ。頼ろつものなら必ずどこかで足を掬われる。

なんとなく胸元のペンダントをいじつて、タシュアを思い出した。彼と比べればこの会場にいる貴族の子弟など、石ころにしかみえない。

桁外れの実力と、それをさらに上回る精神力。普段それを見せることがないが、タシュアは付け焼き刃などといつ言葉とは無縁だ。今さら、何をしているのか。

と、気配がした。

「エレーナ、どうした?」

「それが先輩、ちょっと困ったことが……」

どうしたものか、そんな表情でこの才媛が起こったことを報告する。

「あの殿下にも困ったものです。とりあえず下級生たちが、あとをつけてはいますけれど」

さすがに憮然とした調子だ。

「殿下は……今どこに?」

「つい先程、屋外へ。ナティエスが知らせてきました」

「まことに。行こう」

「はい」

2人で急いで向かう。

「他の子は?」

「全員外です」

脚にまとわりつく裾をさばきながら、横切っている会場が、どこかおかしい気がした。さっきまでと何かが違う。

なんだかやけに引っかかつたが、私はともかく外へ急いだ。殿下のことのほうが先だ。

「あ、先輩!」

シーモアとナティエスが振り向く。

「殿下は?」

「あっちです」

2人の案内で、庭園の奥へ走り出す。

だがとつぜん前に、何人もの男たちが立ちはだかった。

「さあ、会場へ戻りましょう。案内しますよ」
ほぼ間違いないと見て、ドレスの裾に手をかける。
「うわ、先輩いきなり、何してんです！」
後輩が悲鳴に近い声をあげた。

「丸見えですよー。」

「？」

ドレスの下、太腿につけておいた短剣を取ろうと裾をたくしあげただけなのに、何を騒いでいるのか分からぬ。それとも、隠しておいた短剣が丸見えになつたのが、悪かつたのだろうか？
なぜか男たちも、動きが止まつて隙だらけだった。
その男たちに、問いかける。

「アヴァンの紋章は？」

「え？ 猛き火竜がどうかしましたか？」

後輩たちにも緊張が走つた。

さつきの問いは、合言葉だ。警備役は「青い竜」と答えることになつてゐるが、何も知らない潜入者なら、正直に実際の紋章を答えてしまふ。アヴァンの紋章が広く知られているのを、逆手に取つた方法だ。

そしてこの男たちは今、本当の紋章のほうを答えた。

「さあ、そんなオモチャはこちらへ。危ないですよ
まだ分かつていな男たちに、切りかかる。
「エレニア、シーモア、殿下をー。」

「はい！」

「二人が駆け出し、男たちが舌打ちしたその時。

「 伏せろっ！」

爆発音に、とつさにそう叫んだ。私以下全員が大地へと伏せる。轟音があたりを揺るがし、爆風が身体の上を駆け抜けて行く。木々の葉がざわつき、ちぎれて宙に舞つた。

「全員、無事か？」

おさまったところですぐに起き上がり、確認する。

「はい、大丈夫です」

言葉どおり、幸い誰にも怪我はなかつた。庭園の割と奥、木立のほうまで来ていたのがよかつたらしい。

「捕虜を取りそこなつたな……」

辺りを見回して、その言葉が口を突いた。

最初からタイミングが分かっていたのだろう、男たちは逃げ出したあとだ。そして私が切りつけた相手は、殺されていた。

「ナティエス、報告を頼む。他は私と来てくれ。殿下が心配だ」「はい！」

後輩たちの返事を背に、庭園の奥へと走り出す。ミルの姿が見えないのが気がかりだつたが、とりあえず後回しだろう。その行く手、木立の間から、突然光が射した。

「魔法？」

閃く稻妻に、エレーナがいぶかしげな声を出す。

「ルーフェイアだろう、行くぞ」

侵入者がこんな目立つことを、するわけはない。だとすれば戦闘になつたか、あの子が合図で放つたかだ。

だが私たちが現場につくよりも早く、嫌な音が聞こえてきた。
かすかだつたが間違いない。車の駆動音だ。
間に合わなかつたか。
背筋を冷たいものが伝づ。

「あ、せんぱあい！！」

「ミル？」

いつたい何をどうやったのか、ミルが向こうから駆けてきた。ドレス姿だといつのに、普段と変わりない調子だ。

「なんで、そここいるんだ……？」

たしか私たちと、いつしょに庭へ出たはずだが。

「んー？ どうしてだろー？」

緊張感のカケラもない言動に、気が抜けそつになるのを踏みどまる。

「あ、それでえーと、思い出した！ んと、大変なの～」

「……分かつてるから黙つてくれ」

さすがに、返事がそつけないものになってしまつ。 いつこう状況下でのんきにされるのは、あまり面白くない。

「え、でもー、殿下がさらわれちゃつたよ？」

「なんだつて！」

ミルの答えに、そう返すしかなかつた。

最悪の事態だ。潜入していた男たちとのことで、時間を取られたのがまずかった。

「殿下は、どんなふうに攫われたの？」

「ふつうに！」

今度は思わず力が抜けた。会話になつていない。だいいち攫われた時点で、普通も何もないと思つただが……。

「あとで詳細を聞かせてくれ。それと、ルーフェイアはどうした?」

「いつしょにせらわれちゃつた」

思考回路が空回りしたらしく、能天気な言葉が脳に伝わるのに、一瞬間が空いた。

「どういつ……ことだ?」

イザとなればあれほどのキレを見せるルーフェイアが、攫われるとは思えない。

ミルはミルで、伝わらないのが不思議そうな顔で、話を続けた。

「だからね、連れてかれちゃつた。なんか『お嬢ちゃんも一緒に来い』って

「そういうことね……」

やつと納得したという調子で、エレーナがつぶやく。

要するに殿下はあの連中に攫われ、いつしょに居たルーフェイアは首尾よく(?)、付いていくことに成功したらしい。

「ともかく戻るつ。ここにこれ以上居ても、仕方ない」

「そうですね。会場も心配です」

エレーナの言うとおりだった。私たちは免れたが、あの爆発だ。会場が無事とはとても思えない。

「行くぞ」

「はいっ」

そして急いで戻った会場は、まさに地獄絵だった。

ふんだんに使われていたガラスが、爆発で碎けて降り注いだのだから。かなりの人数がひどい切り傷を負っている。

「エレーナ、魔法で手当を。シーモア、ナティエス、ミル、応急手当くらいはもう、習っているな?」

「先輩、あたしらも全員、いちおう回復魔法が使えます」

「よし。重傷者から手当をして行くんだ。出血を止める程度でいい

から

「了解

ぱつと全員が会場へ散った。

私もあるだけの回復魔法を使い分けながら、参加者たちの手当で
に回る。

時々不審がつて尋ねてくるものもいたが、答えていくヒマさえな
かつた。

「あとは、動かさないように。救急隊が来たら、落ちついて言うことを聞いてください」

必要最低限のことだけ指示しながら、会場を奔走する。

「！」

とある場所で、思わず足が止まつた。状況から見て、ここで爆発があつたのだろう。

人の残骸が、飛び散つていた。
いつたい、何人分だろうか……。

「…………たいよ…………」

か細い声に、はつと我にかえる。
少年が倒れていた。

爆風かなにかでやられたのだろう、左腕がなくなっている。

「大丈夫か！」

慌てて駆け寄つて、そつと抱き起こした。
すぐに回復魔法をかけてやる。

「僕、どうした、の……？」

「大丈夫、もうすぐ救急隊が来る。そうしたらすぐに、病院へ連れて行つてもらえるから。だから、頑張るんだ」

「うん……」

とりあえず止血できたことを確かめて、近くにいた女性に少年を頼む。

怒りがこみあげていた。

確かにこの国には、いろいろあるのかも知れない。だがそれが、この子になんの関係があるというのか。

おそらく今日を楽しみにして、両親か誰かに連れられてここへ来て、喜んでいただらう……。

「先輩！」

向こうからシーモアが駆けて来た。

「救急隊、来ましたから」

「そつか」

それならばもう、私たちの出番はそろそろ終わりだらう。エレーナやナティエス、ミルもひきりへ来る。全員が血だらけだつた。

「あ～あ、せつかくのドレスだつたんだけどな。ルーフェイアに悪いことしちやつた」

「まあ、場合が場合だしね。あの子ならわかってくれるのにしても許せないな」

「ほんとだよね」

スマラム育ちだと気づくの2人の少女は、惨状に動じた様子はなかつた。少し胸をなでおろす。

「それで、殿下の方はどうしましょうか？」

「え？　ああ、そつちもあつたか」

むしろ私のほうが、いくらか動転していたらしい。

「だが……どうやって追跡する？」

自問自答する。

いちおうルーフェイアが通話石を持っているが、望み薄だつた。この手のものは真つ先に調べられるし、特殊なもの以外は距離が開

いたら使えない。

それにああいう相手だ。連れて行かれた先もおそらく、結界で通話を遮断しているだろう。わざわざ攫つて行つていることから考えて、すぐに殺されたりといつことはないだろうが、だからといって手をこまねいているわけにはいかなかつた。

と、意外な人物から意外なセリフが出る。

「あ、あたしねえ、クルマ見たよお それとね、いろいろ言つてたのも聞いた〜！」
「本当か？」
「うん」
どこのどこの見ているのが分からぬ能天氣な子だが、これで意外とじつかりしていただらしい。

「よくやった。そうしたら、それを手がかりに……なんと言つていいた？」

「えつとね、『予定どおり白い森へ』って。でね、珍しい北地区の言い回し使ってたから、過激派の『神々の怒り』の連中だと思う」

「そこまで、分かるのか？」

これはルーフェイアの人選が、正しかつたと言わざるをえない。私たちがアヴァン語を聞いても、区別などつかないのだ。

「それで……その森はどこに？」

「アヴァンシティの北西。別荘地なんだ。ただねえ、ちょっと広いから、細かいところまでは……」

「十分だ」

「これだけの情報が揃つていれば、どうにか割り出せるはずだ。学院の方に頼んでもいいし、タシュアならもつと早く魔視鏡網上的情報から、絞り込んでくれるかもしね。」

「まさかこここの通話石で、学院に連絡するわけに行かないな……」
言いながらこここの警備用に渡されたものではなく、来る前に学院が、支給してくれたものを出す。

「こっちでも万全とは言えないが、アヴァン側から渡されたものよりはマシなはずだ。」

「シーモア、ナティエス、すまないが報告だけ、してきてくれないか？ 学院のデリム教官が、傭兵隊の指揮を探つてる」

「あ、はい」

二人の声が揃つた。

「あとからちやんと、私が詳細を伝えに行く。だから、簡単にでいいから」

「分かりました」

駆け出していく後輩の背を見ながら、学院に連絡を入れる。

「任務中の、シルファ＝カリクトウスです。学院長に、繫いで頂きたいのですが……」

繫がつた先にそう言つと相手が代わり、あののんびりした声が聞こえてきた。

「おや、シルファ＝カリクトウスですね。任務はどうですか？」

「トラブルが発生しました。詳細は後で報告しますが……タシュア＝リュウローンを呼んでいただけないでしょうか？」

「タシュアですか……困りましたね」

向こうで、学園長が口籠もる。

「彼になにか、あつたのですか？」

「いえ、ちょっと名指しで任務に就いているのですよ。先ほど発ちましたから、まああと2、3日はかかるでしょうね」

「そうですか……」

「うなると、学院の諜報部に頼むしかないが……正直、あまり信用は出来なかつた。

もちろん、そのあたりの素人などは足元にも及ばない。だが学院の諜報部は、タシュアのような学院生に、翻弄されている有り様だ。とはいえるむをえないだろ？

「でしたら、学院の……」

「先輩すみません、ちょっと代わっていただけませんか？」

言いかけたところで、エレーナが珍しく割り込んでくる。

あまりこうすることをするタイプではないから、何かあるのだろう。そう思つて私は、急いで彼女に代わった。

「学園長、申し訳ありません。エレーナです。先ほどの話ですが、タシュアの代わりにロアに、「伝えただけないでしょうか？」聞かない名前だ。ただ言い方から見るに、彼女がよく知る相手らしい。

「ええ、そうです。詳細は彼女に直接送ります。ではまた後ほど」

そう言つてエレーナは、通話を終えた。

「タシュアの代わりにロアとは……どういう意味だ？」

さすがに彼女の考えていることが分からず、問いかける。

「タシュアのかわりに、ロアに魔視鏡を使って、調べてもうおうと思います」

すばりとエレーナが言つた。

タシュアと並んでこの年齢で、上級隊に入っただけのことはある。私の、たったあれだけの学園長とのやりとりで、なにをしようとしているのか見抜いたらしい。

だが、ロアにタシュアの代わりができるのだろうか。

そう思つ私の表情から、読み取つたらしい。エレーナが言つた。

「先輩、心配にはおよびません。ロアは、タシュアと互角ですから。たまに学院の魔視鏡網上で、やりあつてますよ」

「それは……知らなかつたな」

もつとも自分から、そんなことが得意だととづく者は、いないだ

るうが。

どうぞしてもこれだと、当分は情報待ちだらう。

「そうしたら私は、報告していく。エレニア、情報の方は頼む」
あまり楽しいことではないが、仕方がない。
私はその場を後にした。

Lo a

いきなり学園長室に呼び出されて何事か思いきや、エレニアが連絡してきただけだつた。

なんでも、任務中にトラブルが発生したんだとか。
どうもクライアントとルーフェイアが、いつしょに攫われた(?)
らしい。しかも爆弾テロまであつたんだとか。

んでもつてミルちゃん 多分この学院でもトップクラスの有名
人が聞いた情報元に、アジト探せときた。

もちろん学院のほうにも頼んでるらしいけど、まあ学院だから、
それなりだし。加えてコトがコトだから、一刻も早くつてことなん
だろう。

詳細は直接魔視鏡に送るつてことだつたから、適當な時間を置いて、立ち上げてみる。

あ、これか。

特殊な形式で細切れにされたデータが、送られて来てる。
たぶんこれだらうつていう魔令譜幾つか試してみたら、4つ目くらいで復元できた。

読んでみる。

「ふんふん、なるほど?」

大筋はさつき訊いたとおりだけど、これで探せつて、かなりヒドい。過激派の名前に日星がついてる以外は、ほとんど情報ナシだ。
「まったくエレニアも、いつも気楽に頼むんだから」ともかくドアの外に「邪魔するな」と書いたプレートを下げ、きつちりカギも閉めた。

「セヒツド

「セヒツド

どこのから手をつけたもんか、ちょっと考える。

「ソレいつ時にちばん手つ取り早いのは、直接情報を取ること。で、どこの直接情報が取れるかといつと……。

ダメ元でとりあえず、通信網に潜り込んでみることとする。
魔視鏡と通話石が作り上げた通信網は、世間でじへ普通つてぼど
じやないけど、でもかなり広まってる。
で、そこを利用するものの中には、おおっぴらにやれなうこと、
つていうのがけつこいつ多ご。

ウソみたいで笑っちゃうけど、「テロ組織」を支援する会」な
んでもんが世の中あつたりして、そういうのは概して人目に付き辛
い、通信網上にもぐりこんでるケースが多くった。

で、そこいらあたりを足跡消しつつ渡り歩いて、情報を少し拾い
出す。

感想は ありがち。

ミルちゃんが見つけたその左翼、どうやらクーデーター企てるら
しい。けどこれ以上はさすがに、そこらへんには落ちてなかつた。

じゃ、本格的に行こうかな？

今見てたどこのを足がかりに、接続先の魔視鏡の中を、細かく見
てくる。

「やっぱあつたか

案の定、ふつうの方法じゃ見られない場所があった。
そこに網を張つて、誰かが接続していくのを待つ。

ふつうじや見られないってことは、裏を返せばこじに来るのは、は

何か関係がある人間だけ。だったらそれを捕まえて追跡すれば、何か分かるはず。

もう一台の魔視鏡で雑用こなしながら、張った網に誰かからな

いか、チェックを続ける。

ほら来た。

流れてくる情報を途中で拾つて、ちゃつちやと接続してきたヤツ

の、個別情報を引っこ抜く。

で、抜いた情報を頼りに個人の端末までたどつてみると、それなり当たりだった。

網は張つたまま、この魔視鏡の中を漁る。

「……これはいける、かな?」

思わず独り言。魔視鏡の中に、このテロ集団に関する会話の記録が、ごつそり残つてる。

ほんとにそのままで何の細工もされてないから、速攻で解析してみた。
みた。
つて……。

この魔視鏡の持ち主は、大したことない。
でも交信相手のひとり、マニアなんだろうか? ともかくかなりの情報通だ。

危機感も何もない持ち主だから、記録から即座に、事情通の魔視鏡が特定できた。

即刻ターゲットを変えて、通信網の海から探し出す。上手い具合に、接続中だ。

「ふふん、それなり頑張ってるんだ? でもこれじゃまだまだ甘いね」

思わず魔視鏡に突っ込み入れたりして。

この新しいターゲット、いろいろ気は遣つてはいるけど、まだまだこの程度の防御じや上級者にかかるたら、簡単に中へもぐりこまれる。

ボクもまあ、軍に潜り込む程度の技術はあつたりするから、あつさり命令権をゲットした。

「 ～

市販製の防護壁なんてあつという間、ハミングしながらこの魔鏡の中身を見ていく。

結果は当たり。

会話記録に、まとめてみたらしい日程、さらに主要人物らしい名前まで残ってる。

せめて消しとこうね。ヤバいことしてるんだから。

とりあえずそれっぽいのをこいつちへ写して、接続切つてから、中身を見てみることにする。

「うーん、これ売つたら儲かるかな。あ、違つた。『白い森』探すんだつた」

とりあえず記録の中をざつと検索して、分類してみる。無関係のものも紛れ込んでいたちょっとめんじくをかつたけれど、どうにか関係するものを抜き出した。

「けつこう緻密だなあ……あれ？」

一つのファイルを開いたところで、思わず手が止まる。

「ロデステイオ……？」

慌ててこのキーワードで再検索してみた。ピックアップされた記録を片っ端からあたつしていく。

結果は これもありがむ。

ようはクーデターを起こさうとしているこのグループと、ロデステイオどが組んだらしい。

で、彼らがアヴァン国内で事件を起して注意を引き付けている間に、ロデステイオ軍があの難所の谷を超えて、侵攻しようつてことだつた。

それで「殿下？」とやうりを。

「うなると、あんまり時間がなさそうだ。」

もう一回通信網に接続して、こんどはローテステイオ軍の魔視鏡をあたつてみる。

「あー、もうちよつと、ちよくちよく来とくんだった！」

去年シコマーの一件が片付いて以来、前みたいに遊びに来なくなつてたのが災いしている。

あたりまえだけど他国へ侵攻しようつていうんだから、それなりに作戦としては大掛かり。それに気づかなかつたのは、完全に怠慢つてやつ。

腹いせに軍の内部をあちこち渡り歩いてみて、だいたいのところを手に入れた。

ふうん、なるほどね……。

Ruffeir

車が止まった。

外が見えないようになつていていたから正確には分からぬけど、どうも会場から、かなり離れたところまで来ているらしい。

「降りる」

鋭く言われて車を降りると、森の中だつた。どうりで周囲が静かなわけだと、納得する。

目の前には、かなりの年数を経た石造りの館があつた。けつこう手の込んだ造りをしているから、もともとは貴族かお金持ちの所有だつたんだろう。

追い立てられるようにして、屋敷の玄関をくぐる。外からの見た目通り、中も重厚な造りだつた。

入つたところのホールに、数人の男たちがいる。

真ん中の男性が口を開いた。

「殿下、ようこそ」

「お前か」

吐き捨てるような一言で、この男性が殿下にとつてどんな人物なのかが、だいたいわかる。

「これはなんの冗談だ？」

「それは殿下が、いちばんよく知つていてるんじゃないのか？」

2人が睨み合う。

どうもこの2人、考え方かなにかが対極にあるらしい。ただ事情を知らないあたしにしてみると、完全に理解の範疇を超えた状況だ。

誰か説明してくれないかな。

思わずそんなことを思つたけれど、残念ながらそういう親切な人は、いないみたいだった。

そのまま2人ともしばらく睨みあつていたけれど、ふと男性の方が先に視線を外す。

「まあいい。いずれカタがつくことだしな。連れて行け」
男が命令すると、周囲の男たちが無言で従つた。この中ではそういうの権力があるんだろう。

彼の横を抜けるようにして、連れて行かる。
階段を昇り廊下を行き……通された?のは、棟のいちばん外れの部屋だつた。

「さあ、おまえはここじだ」

男の一人が乱暴に殿下の腕を取つて、部屋へ押し込もうとする。
いけない、分断される。

思つた瞬間、考えるより先に身体が動いた。

「殿下、いやですっ！」

言いながら、殿下の腕にすがりつく。

「なんだおまえ、ほら、離れろ！」

「いやっ！」

強引に引き剥がそうとする男に抵抗して、力いっぱいしがみつく。

「困つたお嬢さんだ。

まあいい、別にいつしょでも構わないだろう。見張りもそのほうが、数が少なくて済む

上位らしい別の男が言つて、あたしと殿下は見張り役といつしょに、同じ部屋に放り込まれた。

「ここで大人しくしてるんだ」

大きな音を立てて、扉が閉められる。

「大丈夫か？ 落ち着くまで休んだらどうだ？」

「え？ あ、いえ、大丈夫です」

心配そうな殿下に、慌てて言葉を選びながら答えた。

「その、殿下と離れるわけには……だから……」「そうこうとか」

殿下、どうしたんだろう? なんだかびょつと、無然とした顔だ。

「あの、あんなことして……すみませんでした」

「いきなりしがみついたりしたから、氣を悪くしたのかもしれない。もう一度と、しませんから」

「いや、いい。それに、怒つてるわけでもないぞ」

口ではまあ言つてゐるけど、なんだかやつぱり、少し怒つてる氣がする。

それにしてもこの部屋、とても監禁するどこのどな思えない。いちおう窓には鉄格子がはまつていてるけどそれだけで、あとはホテルのスイートという感じだ。

部屋の中には、どこかのんびりしてて緊張感がない。

あたしたちが子供だから、油断してんんだろうか?

ただ、抜け出せないのは事実だった。あたしひとりならどうひででもなるけど、殿下が一緒にやそうはいかない。風向きが変わるもの、否が応でもおとなしくしていよいよつなさそうだ。

だからと云つてあまり待つていると、こんどは状況が不利になりすぎる。

かなり微妙なところで、判断が難しかった。

「この場所を、先輩たちに知らせられるといいんだけど。

そうすれば一気に選択肢が広がって、がぜん脱出が楽になる。

でも通話石は、ダメそ�だつた。幸い取り上げられなかつたけど、それは裏を返せば、ここじや使えないって意味だ。それに田の前に見張りがいる状態じや、試すことも出来ない。

先輩たちがここを突きとめてくれることを、祈るだけだ。

とはいへ、それだけを当てにするわけも、いかなかつた。
そもそもあの爆弾テロだ。きっと大丈夫……そうは思つてゐるけれど、果たして全員無事だらうか？ もし巻き込まれてたら、当然こちらの救出どころじやない。

最悪の場合はあたし独りで突破口を開いてでも、殿下を無事逃がさなくちやいけないだらう。

部屋をもう一度よく、見まわしてみる。

場所は3階の角。バルコニーはなし。窓にはしつかり鉄格子。壁は石組み。しかも見張りつき。
おそらく扉の外や廊下にも、見張りがいるだらう。

ちょっと簡単には、いかないかな？

あたしだけなら見張りも鉄格子も無意味だ。最上級魔法でも使えば、ぜんぶいつぺんに片付く。

ただ……殿下がいるから、どうにも手が出せない。うかつなことをしようものなら、あたしはともかく、殿下に危害が及ぶ。

できれば今夜のうちに逃げ出したいけれど、見張りがいるから相談もできなかつた。

これがシユマーの人間同士なら、古代ローマ語の変形を日常語にしているおかげで、普通に会話してもそのまま暗号なのだけど……。

そこまで考えて、はつと思つた。

すぐ試してみる。

『殿下、この言葉おわかりになりますか?』

『ローム語か。大丈夫だ』

即座に答えが返ってきた。

ローム語はかつての大帝国、アムロイデの上流階級の言葉だ。それが帝國の絶頂期までに、他国の上流階級にまで広がった。そしてこの言葉は、いつの間にか上流階級のステータスにまでなつたのもあって、国が滅びても使われ続けていく。だから殿下も、と思ったのだ。

『でしたら、こちらで。たぶん、しばらくは』まかせます

『わかった』

これでどうにか、込み入った話ができる。
見れば見張りの人が不思議そうな顔をしていたけれど、これは無視することにした。

『それで、どうにかなりそうなのか?』

『ムリです。あたしひとりなら、との間に出てこつてますけど』
といふか、あたしだけなら誘拐されないだろ?。

『つまり、僕が足枷ということか。はつきつ面つな』

『え? あ! す、すみません!』

『いや、構わない。本当のことだらうしな』

殿下、いやに素直だ。

なんて言おうか迷う。でも、殿下が言葉を発する方が早かつた。

『それで、本当に方法はないのか?』

『この状況だと、強行突破くらいです。もっとも殿下が……』

「お前ら、何を話している! こいつにも分かるように言え!」
さすがに頭にきたらしくて、見張りの男が怒鳴った。

「そもそも……」

「そもそも、何をするつもりだ? だいいちこの程度の言葉も理解出来ないなど、まさに下級としか言いようがないな。

お前は小学校も出でていなこのか?」

えつと……。

どうしてこう、みんな切り返しが上手なんだらう? あたしなんていつもなにも言えなくて、黙つちゃうだけなの。ちなみにこのとんでもない言葉に、怒鳴った見張りの方は切れかかっていた。

確かに普通は怒るだろうな。

それなのに殿下、平然としている。

しかも更に一言。

「それに僕に傷でもつけようものなら、仕置きを受けるのはお前じゃないのか？」

『いや言われてはやすがの見張りも、手を出す』とは出来なによつた。

「さて、邪魔ものは黙つたようだから、改めて続きを話すか」

殿下ときたら、見張りに分かるよつて、わざとアヴァン語で言つし……。

『魔法はムリだが、僕も一応杖術と格闘技は使える。自分の身くらいなら守れるぞ』

ローム語にスイッチして言つた殿下の言葉は、けつこいつ意外だつた。

『本當ですか？』 でしたら、頃合を見計らつて脱出しましょつ。

『そうですね、明け方少し前くらいに行動を起せば、それなりに楽でしようじ』

殿下が自分で自分を守れるなら、どうにかなるだつた。

『分かつた、お前の言つとおりにしてよつ』

ほんとにどうしちゃつたんだろつ？ 2、3日前から殿下、話をするとあの顔合わせの頃の調子がない。でもこのほうですが、今はありがたかった。

『でしたら、今のうちに休んでおいてください。時間になつたら、起こします。

それからイザとなつたら、あたしが困になります。殿下は先に逃げてください。』

『なんだと？　お前を見殺しにして逃げられたのか？』

殿下の声が厳しくなる。

けど不思議とあたしは、平静だつた。

『そのとおりです。

そのためにあたしたちは、雇われたのですから』

覚悟は、出来ていた。

S y l p h a

学院からの報告に、驚くしかなかった。

「あれが陽動、なのか？」

「ロアの話では、そのようです」

送られてきた資料を、全員で細かく見ていく。

「確かに素人が立てたにしては、この作戦は緻密過ぎるな。ロデスティオが裏についているほうが、よほど納得できる」「そうですね。ロデステイオの軍も、2段構えで展開するようですし……」

それにもしても、誘拐も爆弾テロも陽動の一部とは、あまりに大きすぎる規模だ。

「ねえねえ、ビーサーことなの？ ミルちゃんわかんなない！」
とつぜんの、真後ろからのつんざくような嬌声に、耳が痛くなつた。

本当に状況を理解していないのだろうか？

かといってこのまま放つていおいては、延々と騒ぎつづけるかもしれない。だが私の説明で、果たしてミルが理解できるかどうか…

どうしたものかとエレーニアの方を見ると、彼女は「わかった」という風でうなずいた。

「静かにね。いま説明してあげるわ。

殿下とルーフェイアを攫つたのが、過激派の『神々の怒り』なの

は、もういいわね？」

「うん、それは知ってる～」

「そこ」がロデステイオと裏で手を組んで、クーデターを企んでるらしいわ

「あ、そなの」

ミル……。

他のメンバーも絶句する。

「ちょっとあなた、『そなの』って……」

やはり呆れたエレニアが嗜めようとしたが、ミルのほうが一枚上
だった。

「あれ、エレニア先輩知らないの？ この国これでね、こういうク
ーデターまがいってしょっちゅうなんだ～。」

けど、ロデステイオと組むのは、初めてかなあ？ 行くところまで
行っちゃったみたい

けろりとした顔で言い放つ。

「そう……なのか？」

「うん

アヴァンツてけっこー古い国でしょ？ だからね、そのテンントー
とかをまもる～！ つてのと、そんなんいいから発展だ～！ つてのと
が、しょっちゅうぶつかってるし」

「それは、知らなかつたな……」

伝統に彩られた美しい国だとばかり思っていたが、内情はかなり
複雑なようだ。

「……大人の考えることなんて、どこ行つてもくだらないね。まあ
いいけどさ」

どういう過去があるので、シーモアは斜に構えた調子で酷評

する。

もつとも学院の生徒は、小さい頃に大人から酷い目に遭わされているのが大半だろうが。

「それで先輩、これからどうするんです？」

「殿下が攫われたことはまだ伏せられてるけど、一部の報道関係に、この資料を見ると手が回ってるわ。

そこから話が漏れるのは、時間の問題ね」

そうなつたら、アヴァンの国民も報道も、すべての目がそちらを向くだろう。

当然だがそれ以外のところは、関心が薄くなる。

「殿下が監禁されていると分かれば、捜索と救出をしないわけにいかない。警察と軍が動く」

だがこの国は、軍の規模が小さい。今でも国境線の警備だけで手一杯なのに、両方問題なくやれるとは、とても思えなかつた。

「で、軍が動いたのを見計らって、国境線を越えるってワケですか？」

「ああ」

海に面したこの国は、背後が急峻な山脈に守られていて、侵攻ルートが限られる。

だが国内の騒ぎで守りが手薄になり、情報も錯綜となれば、まず間違いなく突破されるだろう。

この国では正面作戦には耐えられないのを、承知の策だった。

ヒレニアが続ける。

「資料によれば、アヴァン国内が混乱するのを待つて、ロテスティオの特殊部隊がまず侵攻。

ルート上の小都市を制圧しながら、第2陣で正規陸軍が展開するようね」

「市内を混乱させてなんて、ひどすぎ。

そんなことしたら、またあたしたちみたいな孤児が増えるじゃない」

ナティエスが苛立たしげに言つた。

「まったくだね。

けどそんなの簡単、止めりやいいのさ。未然に防いじまえば、全部チャラになる」

どこか獰猛な表情を浮かべて、シーモアがさりとつと言つた。

「まあ、そうだな」

極論だが、間違つてはいない。

ロアが送ってきた資料は実に詳細で、多岐に渡つていた。なにし

る殿下の監禁場所まで特定されていた。どうやら関係者が、迂闊にも書き残していたらしい。だから、すぐにも手は打てるだろ。」の件自体が伏せられているから秘密裏に動くしかないが、幸いシトラの傭兵隊は、そういうことには適している。

「総指揮のテリム教官に、進言してくる」

「そうしたら私たちは一旦屋敷へ戻って、念のために装備を整えておきますね」

口ではそんなことを言っているが、エレーナの表情は、自分が行くつもりだと語っていた。

「頼む。それからシーモアたちは……」

「あ、せんぱあい！」

言いかけた私の言葉を、ミルが遮った。

「……なんだ」

つい、声が冷たくなる。差別するつもりはないが、なにしろこの子には、ずっと振り回されっぱなしだ。

「あーもう先輩ひどおい、いじわるーー」この屋敷行つたことがあるけど、教えてあげないからー！」

「本当か？！」

予期せぬ幸運だ。ルーフェイアの言つことをきいて、この子を行させた甲斐があった。

「むかしね、見学したことある～。

「あ、でも、お父さん殿下のほうが詳しいかな？　ちょっと待つてーー」

嵐のようにミルが飛び出して行つて、私たちは取り残された。

「よく分からない子ですね……」

エレーナがもつともな感想を漏らす。

「でもミル、いつもよりはマシだよね？」

「だね」

台詞を聞くかぎり、クラスがいつしょの後輩たちは、よほど振り回されているようだ。

ほどなくして、ミルが戻ってきた。

「お父さん殿下に、話ついたよー。隠し通路とか載ってる秘蔵の地図があるから、出してくれるって」

何かじいづ、ちょっと出前でも頼んだような気軽さだ。

「あの王太子を、どうやって説得したのや」

「えへへ、ないしょー」

まともに考えるだけ無駄な気がしてきて、私は話を戻した。

「さつきも言つたが、デリム教官の所へ行つてくる。おそらく出ることになるだろづから、エレーニア、準備しておいてくれ」「了解です。先輩が戻り次第、出られるよつとしておきます」

エレーニアの冷静な微笑み。

「シーモアたちは、待機を……」

「えー、先輩冗談でしょ？」

「見くびりすぎですよ、それ」

いつせいに抗議の声が上がった。

「気持ちは分かるが、実戦だ。出すわけに行かない」

「この手のことならあたらしく、スラムに居る時わんざやつましたよ？」

「だよね」

平然と、シーモアとナティエスが言い放つ。

「爆破とか、やつたもんなあ」

「密売人も、追い出したよね」

聞いてはいけないものを、聞いてしまった気がする。

まあシエラのAクラスに入っている時点で、たいていは生半可な経験ではないのだが……やはり何か、納得は出来なかつた。とはいっても、作戦に割ける人数もおそらく限られなかでは、貴重な戦力だらう。

「分かつた、その辺も進言していくる。ともかく準備しておいてくれ」「了解です」

全員が、戦う顔になる。

「久々に暴れられそうじやないか」

「そうだね。スラムと違つて、学院つて大人しいんだもん」頼もしいことを言う後輩たちの声を背に、私は部屋を出た。

Nat t i e s s

パーティー会場から殿下の屋敷へ戻つて、そのあと準備して。作戦決まって許可出るのにちょっと時間かかつたけど、命令が出てすぐに直行。着いたの、綺麗な森の中だつたの。

任務じゃなかつたら、サイコーなんだけどな。
こんど夏休みにでも、遊びに来るのにいいかも。
それにもしても、あんなヒドイことする連中がこんな綺麗な森の中
にいるの、なんだかすつじく許せない。

屋敷の方は、それなり大きかつたり。

それにちょっと面白い造りしてて、平屋みたいな玄関（中身は木
一ルなんだろうけど）の後ろに、3階建ての口の字型の母屋（？）
が続いてた。

「向かつて右奥、3階の部屋だな」

シルファ先輩が、もういちど確認する。

「うん、それでいいです。だつてあの部屋、昔ね、この屋敷の当
主がおかしくなつちゃつて、閉じ込めといた部屋なんだ。
だからね、鉄格子とかついてて、逃げられないんだよ」

ミルつてば楽しそうに解説してくれたけど、なんかそれつて「出

そう」でヤかも。でも、分かりやすいのは助かるかな？

ちなみにあたしたちが立てた作戦は、わりと単純。あたし、ミル、
そしてシルファ先輩が表からの陽動。シーモアとエレニニア先輩が、
その間に裏から入つて救出。

もちろんあたしたち陽動部隊も、頃合いを見計らつて、屋内には

入るんだけど。あと陽動部隊は、シホラのほかの先輩たちも、加わつてる。

教官まで来ちゃつたけど。

ホントはあたしたちだけが良かつたけど、それはさすがに通らなかつた。

「本当におまえたち、打ち合わせどおりやれるのか？」

「だからさつきも言つたじゃないですか。モーグーの、散々スラムでやりましたつてば」

信じてくれない教官に、言い返してみて。

シーモアはもう、ヒレニア先輩といつしょに、館の裏手へ回つてゐる。

びっくりしたのは、先輩たちに開錠とか上手な人が、いなかつたこと。任務が警備だつたから、用意してなかつたみたい。

けどシーモアはそういうのすこいく得意だから、きっと今度は、シーモアがしつかり裏口の鍵、開けてるんじゃないかな？

「任務だからやむをえないが……絶対に、ムリはするんじゃない」

「はーい」

あたしとミルが声そろえて答えた後、教官、下向いてこめかみ押さえちやつた。

「 私からも頼む。無理はするな」

おんなじことだけど、シルファ先輩に言わると、なんか嬉しいかも？ けど実直つと先輩、この作戦立ててから、ずっとこんな感じだつたり。

「だから先輩、だいじょづぶですつてば。いつみえてもあたし、シ

一モアと一緒に、スラムで抗争とかやってたんですよ
言つたら、シルファ先輩が目を丸くした。

「そう……なのか？」

「ですです。

あ、スラムとかのあーゆーのつて、子供同士だから容赦ないんで
すよ。火器とかもばんばん使っちゃうし
さすがにシルファ先輩も、スラムの細かいことは知らないみたい。
なんか、黙っちゃつたし。

「大人相手のほうが、油断してくれるから楽なくらいかな？

じゃ先輩、ちょっと騙してきますから。ミル、ちゃんと援護射
撃してね？ あと、適當などこで来てよ？」

「まかせといて！ んじや行つてらっしゃい
ミルの声援を受けて、屋敷に近づいた。

「まあたしが来てるの、可愛い感じのブラウスにエプロンドレス。だつてこれならどう見ても、戦争しに来たようには見えないもの。ついでにミルのバスケット なんでこんなもの持つてたんだろう？」まで、借りてきちゃつたらし。
そしてあたし、そこら辺の土をひくと手に土じて、顔や服になすりつけてみて。

「それで「迷子の少女」の出来あがり
あとはあたしの演技力？
見張りがけつこう多いけど、ここからが腕のみせび！」
明かりの届いているところへ踏み出したら、兵士（？）たちが一斉にこづちを向いて。

「止まれ！ 何をしに来た！」

「きやあつー！」

口元に両手をあてて、悲鳴上げてみたりして。
ちょうど上手い具合にライトが当たって、「びっくつじてる少女」
が闇に浮かび上がった。

いいかも

「なんだ、子供か……」

「ちょっと待て。子供だらうがなんだらうが、ビッくじてこんなところにいるんだ？」

その疑問、もつともよ。

だから早速あたし、泣きそつな顔をしながら答えてあげたの。

「み、道に迷つて、帰れなくて。ずっと歩こういたら、じつに明かりが見えたから……」

途中で泣いたフリして、その涙をぬぐつてみせる。いつすれば頬に涙と泥のあとが残つて、けつこう可哀想に見えるのよね。

「おねがい、助けて……もうあたし、歩けない……」

その場へ座りこんで、泣きじゃくつてみた。

これはルーフェイアの方が、上手なんだけど。

でもあたしだって、彼女見ながら勉強したんだから。

その甲斐があつたのかな？ 見張りが周りへ集まってきた。

「おー、どうする？」

「どうするって言われてもなあ……けど、このままつてのも可哀想だしよ」

わいわいがやがや。

けど警備してるはずなのに、こんな調子でいいのかな？ そりや

うちは助かるけど。

わあて、と

隠し持つっていた苦無を、そつと取り出す。ちなみに毒つき。

「なあお嬢ちゃん、悪いが……、泊めらんねーんだ。ひとつ送つてやつからせ、それで勘弁してくんねえかな？」

バカなやつ。

泣いてるあたしを慰めに、わざわざしゃがんで抱き寄せるなんて。

「え、あ、なんでもいいです……」

そう言いながら苦無を、男の腹部に突き立てた。

「ぐ、な、なにを……」

「あやああ～～～つ……」

男の呟きを悲鳴でかき消して。

あたしが離れると支えを失った男の体がくずおれて、傍目から見ると「突然どうかなつてしまつた大人から、驚いて離れる子供」という状況になつたの。

「いやいや、いやああつ！！」

ついでだから、パニック起こした風に叫んでみたり。

「なんだ、どうしたつ！」

同時に屋敷から少し離れたところで、どんつといつ爆発音。

ミル、ナイスタイミング

これで完全に、見張りたちの注意が向ひつく行く。

「敵か？！」

「わ、わかりません！」

「あっちだ、あっちで爆発があつたぞ！！」

「何をしている、持ち場を離れるな！」

そこへさらりと銃声。

ミルが何を思ったか、早々に撃つたみたい。まあきっと、なんか命中させてるんだろうけど。

思わず門へと殺到した見張りたちの前に、今度は人影が立ちはだかつた。

風を切る音。閃く銀光。

絶叫を上げて見張りたちが倒れた後には、サイズ（大鎌）を構えたシルファ先輩の姿。

凛々しい

見張りたちに同情する気なんて、さらさらなかつた。

あんな風にテロをやる連中、市街戦をやるうんていう連中、さつさと死んじゃえばいい。

あそこにはやな貴族もいっぱいだつたけど、この日だけはOKってことで、子供だつてけつこういたんだから。それがあの爆発のせいで、バラバラにされちゃつた。

こいつらあたしたち子供のこと、獸の仔みたいにしか思つてないんだ。

大人なんて、信じないんだから。

スラムにいた頃とか、あたし嫌つていうほどソーゆー目に遭つた

んだから。

ともかくあたしも、負けてられないよね。

多分玄関から飛び出してくるはずの連中を待ち構えて、壁にぴたりと張り付いて。

勢い良くドアが開いて、サブマシンガンを構えた大人たちが出てくる。

「ばっか

そうつぶやいて、2本ばっかり苦無を投げてみて。たちまち即効性の猛毒にやられて、2人倒れる。

「なんだ、どこだつ！」

「なんでしょう」ミルちゃん知らないで～す

さすがに大人たち、これには度肝抜かれて硬直。しかもすかさず、ミルってば連射銃を乱射。

たちまち人数が半分以下になる。

さらに先輩たちが前へ出て刃を振るつたら、敵とかもうほとんど残つてなくて。これで警備つて言うんだもの、バカにしてるよね。そんなこと思つてると、突然頭上で雷が閃いた。でも雷雲なんてない。空は満天の星だもの。

なのに2度3度、雷は閃きつづける。

そつか、ルーフェイアだ。

確かによく見ると、ミルが「監禁されている」と言つてた部屋のあたりだもの。きっと彼女、合図代わりに魔法使つてるんだろう。

そうすると、もうちょっと派手にいつたほうがいいよね？

バスケットの中に入れておいた、小型の爆弾の安全装置、外して

みる。

それをまず中へ放り込んで……それからあたしたち、屋内へと踏み込んだ。

Ruffeir

ふつと目が覚めた。

なにかが、動こうとしてる。

戦場でよく感じた気配だ。この感覚の後は大抵、奇襲をうけることが多い。

室内はまだ明かりが点けられていて、起き上ると目立つから、いつでも動けるように体制だけ変える。

(どうした?)

いつしょに寝ていた殿下が、そつと聞いてきた。怖がるフリをして、上手く殿下のベッドに潜り込めたから、何かと便利だ。

(分かりません。でも、何かありそうで……)

(やうか)

時間はよく分からないけど、まだ夜明けにはだいぶありそうだ。2人に増やされた見張りが、片方は寝ていて、もう片方も眠そうになっていた。

外から話し声が聞こえる。どうもこの夜半に、誰か尋ねてきたらしい。

耳をそばだてる。

どうも女の子が道に迷って、ここへ泊めて欲しいと懇願しているようだった。

けど、この声。

どう聞いてもナティエスの声だ。とすると、先輩たちのことを突きとめて助けにきてくれたんだろう。

だとすると全員、テロに巻き込まれないで済んだんだろうか?

と、どよんとうる爆発音が響いた。

「な、なんだ？？」

驚いた見張りのひとりが、半分寝ぼけながら窓へ駆け寄った。あたしもとつさに起き上がる。

「ルーフェイア、何が起こった

『殿下、ベッドの下へ。細かいことはわかりませんが、安全とは言えないようですから』

こちらには古代ローマ語で答えておいて、見張りの様子をうかがう。

「まつたく、なんだってんだ？」

銃声。ガラスの碎ける音。

窓の外を見ていた見張りが、倒れる。

「おいどうした……うわあっ！」

慌ててそばへ寄つてみたものの、眉間に穴が開いて絶命している

仲間に、残つた見張りが驚いて叫ぶ。

その隙を、あたしは見逃さなかつた。

一拳動で間合いを詰め、味方の惨状に思わずのけぞつた見張りへ肉薄する。

鳩尾に左の蹴りを叩きこみ、さらに身体をくの字に曲げた男の首筋へ、両手を組んで振り下ろした。

骨の折れる鈍い音。でもあたしの力で、しかも武器がなくては、大人の男性相手に手加減できない。

結局声も立てずに、この男も床に倒れた。

「 シエラの凄さは聞いていたが、噂以上だな」

ベッドの下から出てきた殿下がままず言つたのは、この言葉だった。
けつこう肝が据わっている。

「このくらいは、学院生なら大抵できます」
なにしろ小さい頃から、傭兵としての訓練が続けられるのだ。こ
の年齢　特にAクラス　ともなれば、それなりの戦力になる。
「えっと、1、2分、時間をいただだけますか？　ちょっとこれじゃ、
戦えないで……」

「今戦つていなかつたか？」

殿下に突つ込まれたけど、このままというわけには行かないから、
急いで動きづらいだけのドレスを脱いだ。ミルあたりなら平氣そう
だけど、あたしはあんまり、ドレスで戦う趣味はない。

下は当然戦闘服。ドレスが裾の広がるデザインだったおかげで、
ツールキットまで入れたポーチもつけてあつた。

ついでに太ももに止めておいた小太刀を外して、腰につけなおす。
さすがにほつとした。やっぱりこの状況で丸腰というのは、どう
にも落着かない。

「たいしたもんだな」

「え？ 普通、かと……」

警護のためにいるのだから、いつでも戦えるようにしておかなかつたら、意味がないんじゃないだろうか？

やっぱしこうこう由緒ある人は、平和で感覚がずれてるらしい。

「そうだ。殿下、これをどうぞ」

予備に、くらいの気持ちで持ちこんでいた格闘用のグローブを、殿下に渡す。どうせあたしは小太刀があるから、格闘技は蹴り技主体で、拳は殆ど使わない。

そして気が付いた。

脱いだドレスを丁寧にたたむ。

「殿下、すみません。せつかく……用意して、いただいたのに自分のならこの辺へ置いていくところだけれど、借り物じやそうはいかない。

「構わん。文句ならあとで、この連中に言いつけてこすんな」

言つひま、あるだろ？

「すみません。あの、とつあえず殿下が、持つていてくださいませんか？ あとできちんと……洗つて、お返ししますから」
たたんだうえで、キットに入れておいた細い糸でしばったドレスを、殿下に手渡す。

「気にするな。今度はもう少し、マシなもの用意してやる

それは……ちょっと違つような？

「それで、どうやって出るんだ？ 鍵がかかっているだろ？」

「だいじょ「うぶです」

そう言つてまず、あたしは窓の外に低位の雷系魔法を立て続けに放つた。これを見れば先輩たち、あたしたちがどのあたりに監禁されているか、分かるはずだ。

それからドアに張りついで、廊下の様子をつかがってみる。人の気配はなかった。さすが素人、あつさり陽動にひつかかったらしい。

「殿下、下がつていただけますか?」

重厚な作りの木製のドア。

普段だつたら簡単に魔法で破壊するところだけれど、今は殿下を巻き込めないから、その方法はムリだ。

とすると。

ドアの前で呼吸を整えて集中する。憑依させっぱなしの精靈に意識を向けて、その力を呼び出していく。限界まで集中して狙いを定めて……。

「哈つ！」

一点めがけて蹴りを入れると、思惑通り中央部が割れた。あとは2、3回蹴飛ばしだけで、脱出口が出来あがる。

「これで本当に、閉じ込めた氣でいるんだもの。いつでも出ていいけるの、氣が付かなかつたんだろ?つか?」

周囲の気配に氣を配りながら、あたしが先に出る。幸い辺りには、廊下を曲がつた先も含めて、気配はなかつた。

「殿下、どうぞ。今なら大丈夫です」

「あ、ああ……」

なんだか呆然としている殿下を、部屋の外へと促す。いつまでもこの部屋に留まっていたら、よけいに危ない。

「で、どっちへ行くんだ?」

「どこにも行きません」

そう言いながら、あたしは隣の部屋のドアを開けた。

勝手知つたる場所ならともかく、これだけ広い他人の家をウロウロしたら、迷うのがオチだ。何より救出に来るはずの先輩たちと、行き違ってしまうだろう。

だから隣あたりの部屋に潜んでいるのが、この場合は妥当だ。他に手段がないならまだともかく、殿下を危険にさらすわけにはいかない。

部屋の中へ入つて、鍵はかけずに扉だけ閉める。それからそつと窓へ忍び寄つて、外を覗き見た。

闇を通して、何人もが倒れているのが見える。それに屋内からは時々爆発音まで聞こえるから、陽動部隊はそつとう派手にやつてるらしい。

「」の調子なら救出隊　きつと一手に分かれてるはず　は、じきに来るはずだ。

「あ、殿下。えっと……掛けて、待つてください。あたしはこれから、外へ行つてきます」
けど、答えがない。

「殿下？」

「お前たちはいつも、こんなことをしていいるのか」
厳しい声。

「」のやつて人を殺すことばかり覚えて……学院といつのは、いつたいなんなんだ！」

「そのシエラ学院の傭兵隊を、アヴァンは頼りにしています」
そう言い返せたのはたぶん、学院をそんな風に言つてほしくなかつたからだらう。

あたしにひとつ学院は　夢、そのものだ。

「それにご存知のとおり、学院生のかなりの人数が、親と縁の薄い者ばかりです。

あそこへ行くことがなかつたら、もつとつぐに死んでいたかもしない。そんな人ばかりなんです」

「……」

殿下が言葉に詰まる。せつとそんな世界は、想像を遥かに超えて
いるんだろう。

でも、事実だった。シルファ先輩も、エレーニア先輩も、ロア先輩
も、シーモアも、ナティエスも、みんな親なしぐれだ。

「これがいちばんいい……そやはあたしも言えません。うど、生き
られただけ、衣食住に困らないだけでも十分なんです」

「だが……」

殿下の言いたいことも分かつた。けど学院生のほととぎは、ほか
に選択肢を持たなかつたのだ。

「……殿下」

「なんだ」

「もし殿下があたしたちをそのよひに懲られるのなら……貧しさと
戦争とを、なくしてください」

それがなければこんな目に遭わずに済んだ、それが殆どなんです。
孤児は

分かつてゐる。これがそんな簡単に無くせないことなんて。ただ
それでも、言わずにはいられなかつた。
たぶん……殿下に知つてほしかつたのだ。

今はもう権力を失つたとはいゝ、神聖アヴァン帝国の末裔という
だけで、そつとうの影響力はある。だからこそ分かつてほしかつた。
自分ではどうすることもできずに、戦争の中や社会の底辺で潰さ
れていく子供たちがいることを。

明日の夢を、強引に断ち切られる命があることを。

奇妙に長い、僅かな沈黙。

「……わかった。そうしよい
それが殿下の答えたつた。

「実を言つと」

「殿下、ルーフェイア！」

なにか言いかけた殿下の言葉に重なつたのは、エレニアア先輩の声
だ。

「先輩、じこです！」

大声ではないけれど分かるよつに答えて、そつとドアを開ける。

「無事なのね？」

「はい」

思つていたよりずっと早く、先輩とシーモアどが来てくれた。す
ぐに殿下を引き渡す。

「ルーフェイア、こっちからシルファ先輩たちがくるから、行つて合流してくれるかしら？ 私たちは殿下と一緒に、もと来た道順で外へ出るわ。

そうそう、これ、あなたの太刀よ

つまり、あたしに単独で陽動をやれと言つんだろ？
もつとも屋内にいた敵うち、かなりが出払つてゐみたいだから、別にムチャを言つてはいるわけじゃない。

「了解しました。できるだけ派手にいくよ！」

使いなれた太刀をうけとりながら、先輩に答える。

「頼むわ。でもムリだけは……しないようにね？」

「はい。先輩たちもお気をつけて」

そう言つて一手に分かれだ。

今度は……足枷がないから思いつきりいけるだろ？

向こうの角から飛び出してきた相手に、あたしは太刀を構えた。
さほど訓練もしてないかのような不安定な刃をよけて、あつさ
りと切り伏せる。

「ルーフェイアっ！」

死角になつてゐる方向から鋭く呼ばれた。シルファ先輩の声だ。
もうひとり残つていた敵を薙ぎ払つてから、そつちへ視線を移す。

「先輩！」

視界にシルファ先輩、ナティエス、ミルの姿が入る。さつきエレ
ニア先輩とシーモアにも会つたから、これで全員だ。

「無事か？」

「はい。先輩たちのほうこそ、なにもありませんでしたか？　たぶん　テロがあつたと、思つんですけど」
目の前にいるのだ。大丈夫なのはわかつてたけれど、やつぱり心配で尋ねてみる。

「ああ。かなりひどかつたが、私たちは全員、無事だ」
「よかつた……」

ほつとする。あの爆発はかなり大きかつたから、巻き込まれたら命だつて危なかつた。

「ともかく行こう。陽動だから、派手にいくぞ？」

「あ、はい」

返事をしてふつと思いつき、呪文の詠唱を開始した。

「空の彼方に揺らめく力、絶望の底に燃える焰、よみがえりて形を成せ　フラー・ブルイ・クワッサリーツ！」

「なにつ！」

炎系でも最上級なのが悪かつたのか、シルファ先輩が慌てる。
でも魔法のほうは思惑通りで、幾つか先の部屋が瞬時にして消えうせた。

「ルーフェイア、これじゃ火災に……」

その辺はぬかりはない。

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時と
なせ　フロスティ・エンブランスツ！」

上級の冷氣呪文を放つて、熱くたぎっていたそこを瞬時に凍りつかせる。これなら火災の心配は無用だ。

「はつで～」

ミルが歓声をあげる。でも彼女に、言われたくないかもしねりない。

「いんどはぢつちだ！」

この騒ぎにて、残っていた敵が駆けつけてくる。
そこへあたしは、無言で突っ込んだ。

太刀が閃く。

一閃、二閃。

あがる絶叫。

呆れるほどに弱い。

「さつすが。じゃああたしもかな？」

声と同時に気配を感じて、あたしはすっとよけた。苦無がわきを通りすぎて、向こうの敵に突き刺される。

即効性の毒が塗つてあつたんだから、その敵はたちまち倒れた。
その間に、もうひとり切り伏せる。

「ルーフェイアっ！」

先輩の声と共にまた背中に気配を感じて、身体をすりす。さつきまであたしがいたところを、サイズの刃が薙いだ。血しぶきがあがって、再び敵が倒れる。

全部が片付くまであつという間だった。

「よし、戻ろっ」

「はあい」

ミルが緊張感の欠片もない返事をする。これで意外にもやるのだから、世の中というものはわからない。

飛び道具を持つナティエスとミルとがまず敵を掃射し、そこへあたしとシルファ先輩が突っ込んで残りを片付ける。

あたしも、覚えようかな？

最前線ではすでに、銃は時代遅れだ。手から離れて飛ぶ弾は小さいから、持ち主の魔力をちゃんと伝えず、相手の魔法障壁を上手く破れない。だから用途はせいぜい、威嚇くらいだ。

でも、前線を離れれば話は違ってくる。

一般の人は魔法障壁を、常時展開なんてしてない。訓練しなければ出来ないし、それを補助する道具もかなり高価だ。だから十分、銃は通用する。

でも、いちいち武器を持ち変えるのは、隙が大きいし……。

そんなことを考えながら、田ぐらましに魔法を放ち、階段を一気に飛び降りて切り込む。

やつやつて思つたほど時間をかけて、1Fのホールまで降りた。全員が止まる。

おなじくここに残つていた敵の全部と、あの男。

「やつてくれたな。だがここまでだ。もつとも殿下の居場所を教えるなら、多少は考へてもいいが」

「断る」

シリフア 先輩の即答。

「ほう、命が惜しくないのか？」

「あんな真似をする連中に、命乞いなどしない。だいにち、する必要もない」

先輩が、やはり毅然と返す。

「小娘どもが言つた。まあいい。この腐つた国の連中に味方したのが、運の尽きだつたな」

「ば～か」

割つて入つて、とんでもない一言を返したのは、ミルだった。

「自分が腐つてゐるから、そつ見えるんでしょ？ だから何？

朝起きて、ご飯食べて、仕事して、子供の面倒見て、友達と話して、家へ帰つて、みんなで夕食にして、ゆつくり寝て。

それのどこが腐つてゐるのよ？」

一気に言つたてる。

「伝統が全部正しいなんて言わなによ。けどね、壊せばいいってもんじゃないでしょ。

ましてやそれを、自分が権力につく手段に使おうなんて、どうやつたってバカのすることじやない。

あたしね、この国壊そつとするやつ、許さないから

いつものミルとは、まったく違つた。

「まだおシメも取れでないようなガキが、許さないだと? 面白い冗談じゃないか」

「黙つた方がいいんじゃない、ヴィクトース＝マヴァウリー＝ド＝ファレル?」

「」の一言で、男の顔色が変わる。

「貴様いつたい……！」

「さあね～ あ、そだ。シルファ先輩、思いつきりやつちやつといいですよ～。こいつ、ほんつとクズなんだ。

継承権欲しくて、過激派と組んでテロまで起こすんだもん

「言わせておけば ！」

けど、あたしのほうが早かつた。

「 カーム・フィルド！」

まず範囲をかなり絞つた無効化魔法を、シルファ先輩、ナティエス、ミルの3人に一気にかける。

これだとしばらく回復魔法も通さないけど、一方で強力な魔法を遠慮なく使える。

次いで 。

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時と
なせ フロステイ・エンブランスつ！」

ホール中に、文字通り冷氣の嵐が吹き荒れた。冷氣系の魔法は建
物を破壊しないから、屋内での使い勝手はいい。
けど、人間はタダじやすまない。術者があたしや無効化魔法のか
かつてる先輩たちはともかく、それ以外は大混乱だ。

「ナティエス、ミル、今のうちに脱出するんだ」

状況を見て取ったシルファ先輩が、的確な指示を出す。

「はいっ！」

2人が混乱の真っ只中を駆け抜けて、外へと向かった。
あたしと先輩も、武器を振るいながらすぐに続く。

「じゃあね、ヴィクタース 今度はきっとないんじやないかな」

ミルが長銃を乱射しながら、例の男の傍を突破する。
2人の視線が合つたように見えた。

「……そうか、そういうことか……」

まるで地獄の亡者のような声で、ミルにヴィクタースと呼ばれた
男がうめいた。

「貴様ら、親子で……それなら……」

なにかに取り憑かれたような表情。

同時に聞こえたびしりという亀裂音 なぜ聞こえたのだろう
に、とつさに呪文の詠唱を始めた。

間に合つか？

一瞬よぎつた思いを振り払つて、魔法に集中する。

「 エターナル・ブレス！」

最強の防御魔法を、ナティエスとミル、それにシルファ 先輩に放つ。

理由は分からぬけど、あたしは昔から、同じ魔法なら複数同時にかけられた。それは普通じゃありえない事で、とても怖かつたけど、こういう局面でいつも役にたつてる。

ただ、これ以上はムリだ。もともと微妙なこの防御魔法は、あたしにまでかける余地がなかつた。
でも先輩とナティエスとミルは、耐えられるだろう。
そして、建物が崩れた。

S e a m o r e

エレニア先輩と2人、どうにか敵にも出会わずに、殿下を外へ連れ出すことができた。

「ラッキーだつたつてのがまあ、適當かな？

「とりあえず、ここまで来れば一安心ね」

「ですね」

後は向こうの木立の中に停めてある車まで行ければ、殿下だけは無事返せるはずだ。

「殿下、申し訳ありませんが、もう少しだけ走つて頂けますか？」

「わかった」

殿下つてばどうしたんだか、やけに素直だ。ルーフェイアになんか、言われでもしたのかね？

ただ、抵抗しないのは助かる。

屋敷の方からは、さつきから豪快な爆発音が聞こえてきてた。どうもルーフェイアのやつ、片っ端から上級呪文ぶつ放してるらしい。ともかく陽動の先輩たちやルーフェイアがド派手にやつてくれてるお陰で、こつちはメチャクチャに楽だ。

暗がりを縫つようにして屋敷の周囲を回り、表側へと出る。

「まだ来てないわね」

「ええ」

エレニア先輩の言つ通り、陽動部隊はまだ屋敷の中だ。

「仕方ないわ。第2案通り、先に戻りましょ」

できれば全員で戻りたかったけど、殿下の安全が最優先だろ？

と、いきなり声かけられて、心臓跳ね上がるほど驚く。

「おまえたち、遅いではないか」
つて、おっさんなんだって」「……？」

「父上？」

殿下も意外だつたらしい。ちょっとうわざつたみたいな声をだしてゐる。

「無事だつたか。さあ、急いで屋敷へ戻るぞ。

お前たち、ご苦労だつたな。明日の任務に遅れるでないぞ」

このクソ親父！

クライアントじやなかつたら、ぶん殴つてやるといなんだけどね。

「父上、それはないでしょ？ 彼女らは命懸けで僕を救いに來たんです。だいいち、まだ仲間が残つています」

はい？

殿下、なにか悪いもんでも食べたか？

「シエラの傭兵隊など、放つておけば勝手にやるだろ？ 帰るぞ」

「帰りません」

まさか途中で、誰かと入れ替わつたってことはなさそうだし……。
うーん、やっぱお気に入りのルーフェイアが、心配なんだろか。

「彼らが全員無事に戻るまでは、僕はここにいますからあ？ 全員つてなんだいそれ？」

どうも調子狂うね。

だけど今は、のんびりしてられる状況じゃない。エレーナ先輩が、殿下に促す。

「殿下……お心遣いはありがたいのですが、ここはファレル卿の仰る通り、先にお戻りください。その方が安全です」「だが……」

まだ渋るとか、いつたいビュンなつてんだか。だいいちこつちが「戻れ」って説得するなんて、奇妙としか言いようがないじゃないか。

「殿下、私たちは全員、訓練を受けています。それもかなり高度なのを。ですから、『心配なさらずに』」

「……」
やっぱルーフェイア、殿下になんだか言つたらしい。で、殿下の方もお気に入りの美少女に言われたから、考え改めたんだろう。

単純。

けどここまで変わるとか、いったいなんて言つたんだろね？ まああとで落ちついたら聞いてみるかな。

ともかくこんなところに長居してたら、口クなことにはならないはずだ。スラムにいた時もそうだったけど、ヤバいとこからはさつとズラかるに限る。

「ともかく行きましょう。長居は禁物です」

エレニア先輩も同じことを言って、暗がりの中、建物から急いで離れる。

中じゃ、何か騒動が始まつたっぽかった。なんか聞こえた銃声は、ミルだろ？。

ただ、次は予想外だった。あたしらが見てる前で、建物が崩れ出ます。

「ちょっと待ちなよっ！」

思わずそう突っ込んだけど、それで崩れるのが止まるワケがない。ただ、2人ばっかり、人影が飛び出してきたのはわかつた。舞い上がる土煙を透かして、誰だか必死に見極める。

「ナティエス、ミルっ！！」

いつも一緒にいるんだ、すぐにわかる。
ざつと辺りを確かめたけど、敵はいなそうだったから、そっちへと走った。

「大丈夫かい？！」

「うん。ルーフェイアの魔法でね、なんでもなかつた……あれ？よく考えたらシーモアも殿下も、なんでまだここにいるの？」

いや、こつちもさつさと帰る予定だったんだけどね。
んであたしが説明しようとしたんだけどさ、殿下の方が早かつた。

「お前たちを残して逃げるのは、卑怯だと思つただけだ

「殿下……熱、ありません？」

ナティエス、ナイスなりアクション。殿下の額に手をあてて、熱計つてるよ。

「あなたたち、それビビりじゃないでしょ？……」

「え？ あつ！！」

どうも殿下の妙なペースに巻き込まれて、大事なことを忘れてた。

シルファ先輩と、ルーフェイア。

無事だとは思つけどさ……。

だからあたしは、聞いてなかつた。殿下とミルの会話を。

「L ouwe 11

「で～んか」

「なんだ」

薄い水色の瞳をくぐらべるゝとさせて、シヒラから来ているひとつが、声をかけてきた。

名前は確か……ミルと言つたはずだ。

「ルーフェイアにさ、なんて言われたの？」

この少女は苦手だった。あまりにも突拍子がなくて、ペースが乱される。

親の顔が見てみたいと思つ。

「お前に言つていわれはないな」

「あ、そ。けどまあ、学院の孤児の話でも聞いたんだるな
ずばりと言われた。

「聞いて、じだつた？」

「どうと言われても……」

クスクスと、含みを持たせて笑う様子がカソンに障る。

「うふふ、言わなくていいよ。ここにいるんだもん、ルーフェイアの言いたいこと、わかつたんでしょ。
やつと殿下、自分の立場わかつたんだ」

「立場？」

何のことかと考え込む。

「そ、立場。殿下、フツーと違うのが自慢でしょ」

「違つと言つても……」

言いかけて、考え込む。

確かに自分は庶民ではない。生まれたときから明らかに違つ。だが、それがどう違つのか、自分でも分からなくなつていた。

下衆な庶民とは住む世界が違つのだと、以前のよつて思えない。依然として背負つもの、『えられたものは確かにあるが、見下していたはずの者と、驚くほどに距離がなくなつていた。

「そうか、立場か そうかもな」

なんとなく、そんな言葉が口を突く。

「私、思つんですね」

「？」

「」の少女の口調が一変した。

「権力は、けしてタダではないと。果たすものを果たして、初めて釣り合つものじやないかと。

だからそれを怠つたら、それだけのものがはね返つてくるんじやないかしら？」

なめらか過ぎるアヴァン語、上流階級特有の言いまわし、不思議とわかつてゐるような言い方。

「所詮自分で手に入れたわけではないもの、地位も権力も。ようするに借り物よね。だから返す時に、利子がないようにしておかないと。」

それを勘違いして振りまわしても、みつともないだけだと思つわ

「お前……誰なんだ？」

「さあね～。でも、名前くらいは教えといてもいいかな？」

再び口調がもとに戻る。

「ミルドレッド＝セルシエ＝マクファーテイ……じゃない、ミルドレッド＝セルシエ＝ハワール＝ドナ＝エドワードって言つたら、わかる？」

「なんだと……！」

血の気が引くとは、このことだらう。だが当人は、気にした様子はなかつた。

心配そうに、崩れた館のほうに視線を向ける。

「ルーフェイアとシルファ先輩、大丈夫かなあ？　きっと、大丈夫だと思うんだけど……」

Sympa

ルーフェイアの魔法に巻き込まれ、ミルから弾を食らった男の形相は、歪んでいるとしか言いようがなかつた。

「……そうか、そういうことか……貴様ら親子で……それなり……執念としか言いようのない声で、ヴィクター斯という男は言つ。

なんなんだ、この男は。

一瞬寒気を覚える。

その時、自分たちに魔法がかけられるのに気が付いた。
最強の防御魔法。ルーフェイアだ。

だが、微妙に不安定だ。同じ魔法を同時に幾つもかけられるのは驚きだが、そのせいで完全には行かないらしい。
だとしたら、これ以上は……。

思わず少女の方を振りかえる。私とミル、それにナティエスにはかかっているが、この子はまだのはずだ。

同時に天井に、大きく亀裂が入つた。

バカっ！

魔法もなしに直撃を受けたら、いくらルーフェイアとて助かりようがない。

とつさに精霊ヴァルキュリアを、憑依状態に持つて行く。通常の数倍に引き上げられた体機能で床を蹴り、少女の上に覆い被さつた。華奢な身体が傷つかないよう、しつかりと抱え込む。かなり大きな破片が降り注いだが、ヴァルキュリアが憑依状態にあるのと防御魔法がかかっているのとで、なんなく弾き返す。

長かつたようだが、実際にまだほんの少くなかつたはずだ。気付くと、静寂だけになつっていた。

身体の上のしかかる瓦礫をはねのけ、続いて抱えていたルーフェイアの手をひいて立ち上がらせた。幸い怪我をした様子はない。だが、それで済ますことが出来なかつた。

「 なんてムチャをするんだ！ 怪我でもしたらどうするつー！」
思わず叱りつける。

「 ただでさえ華奢なのに、ルーフェイアが魔法なしで、無事で済むわけがないだろつー！」

「 ……すみません……」

ほんとうに悪いことをした、そういう表情でルーフェイアが謝る。我ながら甘いとは思うが、ついそれ以上言えなくなつた。

「 との是非はともかくとして、この少女が私のことを考えていたのは、間違いないのだ。

「 いや、私もつい……すまない。だがどうして、自分にかけなかつた？」

私が精霊ヴァルキュリアを憑依状態にして乗り切ることは、この少女は知っているはずだ。なのになぜ、自分を犠牲にしてまで私に魔法をかけたのか。

しかしきつく言ったのがまずかつたのか、答えようとしない。

「 ……聞かせてくれないか？」

重ねて尋ねる。綺麗な色の唇からようやく、言葉がこぼれた。

「 その……タシュア先輩には、シルファ先輩しか……いないから……」

「 ルーフェイア……」

いつたいどこで知つたのだろう? まるで兄と姉とを追いかけて歩く妹のように、私たちを慕つてゐるだけのことはあった。それにしても本来なんの関係もない他人を、なぜこうも慕つのだらうか。

戦場での経験の、反動なのか。そう思つと、この少女が可哀想になる。

「ともかく、もう一度とするんじゃない」

「……はい」

うつむいたままの少女の頭をなでてやると、やつと顔を上げた。

「先輩、ルーフェイアっ!」

みんなと……そして殿下とが駆けてくる。

「2人とも無事か?」

殿下の言葉に、「おや」と思った。お気に入りだったルーフェイアだけではなく、私のことまで心配してゐる。

「大丈夫です。シルファ先輩がかばつてくださいましたから。先輩も……大丈夫ですよね?」

「え? ああ」

もしかすると何箇所か打ち身くらべつたかもしねいが、その程度だ。

「僕のために済まなかつた。屋敷の方へ医者を呼ぶよつて言つておいたから、戻つて診てもらうといい。」

こつちはじき警察が来るから、父にまかせておけばいいだらうルーフェイアと2人、思わず顔を見合す。

(先輩、殿下へんですよね?)

(ああ……)

思わずこいつそりそんな会話を交わしたが、理由はわからなかつた。いざれにせよ、いつたん屋敷へ戻るのが賢明だらう。

「よし、戻るか」

「了解！」

後輩たちの声が揃つた。

Ruffer

「よ。どだつたんだ?」

「あ、イマド」

あの騒動から一週間ほどして、あたしたちがおもへ、学院へと戻ってきた。

ちなみにいきなりテロが始まった建国祭のほつは、殿下の誘拐事件に絡んで首謀者が捕らえられた。ただし重体。こともあって、警備は強化したもののそのまま続行された。

さすがに伝統ある国なだけあって、雅やかな式典のオンパレードだった。

殿下、どうじてるかな?

救出後どうしたわけか殿下のあたしたちへの対応は完全に変わつて、警備を兼ねながら、あちこち連れて行ってくれたりした。

別れぎわに来年の建国祭にもみんなで来るよう、ずいぶん説得されたし。

けど肝心の学院の方は、授業のレポートがたまっていたりと、楽しつけたシケが回ってきていた。

みんなで手分けしてやれば、早いかな?

ただそうすると、どうにうわけがあたしの分が多くなる。

「数学と物理、まとめといてやったぜ」

「ほんと? ありがと」

何事も手回しのこにイマドが、ノートを差し出した。開いてみると

と確かに、休んでいた間の授業が、わかりやすくまとめてある。でもさつと最後まで見てみて、敵地で包囲された気分になった。

「こんなに、進んじゃったの……」

追いつけるかどうか自信がない。

「教えてやるって。それよりなんか、アヴァンじゃ大変だつたらしいな？」

「ううん、たいしたこと、ないの。ちょっと誘拐されただけ」

言った途端、イマドが呆れ顔になる。

「おまえなあ、誘拐をンな簡単に言うなって」

「え？ でも、たいしたこと、なかつたし……」

閉じ込められたうちにも入らないような誘拐なんて、物の数に入らないだろう。それよりもあたしとしては、爆弾テロのほうが許せなかつた。

「もう、あんなこと……ないと、いいんだけど」

「ホントだな」

そこへシーモアたちが来た。

「イマド、話してるとこ悪いね。ルーフェイア、ほらこれ」

「へえ、似合つてるな」

彼女が差し出したの、例のみんなでドレスを着た時の写影だ。

「シーモアも別人みたいだな。つててめえ、危ねえな、殴るなよー。」「自分の言葉に責任くらい、持つんだね

なんだかちょっと腹が立つ。

イマドもイマドだけど、シーモアもシーモアだ。何も殴ったり、しなくていいのに……。

「これ、シルファ先輩か？よくあの先輩が、こんなもん着たな～」
たいして痛くもなかつたみたいで、また[写]影を手にしたイマドが
感心する。

でも中央に[写]るシルファ先輩、ほんと元気のかの令嬢みたいだ。

そうだ。

いいことを思いつく。

「ねえ、これ……余つてる?」「ん? ああ。知り合いの先輩に頼めば、何枚でも焼いてくれるよ」「じゃあ、ひとつ余計に……もらつても、いい?」そう訊くと、シーモアがうなずいた。

「でも、どうするのさ?」「えっと……タシュア先輩に、あげようと思つて」「なんとなくだけシルファ先輩、ドレスを着たなんて、言わない氣がする。

「こんなに綺麗なのに。」

透明な板 昔は球状だった の中に浮かび上がる、ちょっとと恥ずかしそうな先輩。いま見ても、薄紫のドレスはとっても似合つてゐる。

それを手にして立ち上がつた。

「泣かされんなよ

「だいじょうぶ、先輩……いい人だから」

突つ込むイマドにそう答えて、教室を出た。少し離れた、先輩の教室のところまで行く。

いるといいんだけど。

そつと入り口から覗きこむ。

けど、教室にあの銀髪の姿は見当たらなかつた。授業はこれから始まるのに、なぜか行つてしまつたんだろうか?

「そんなどうね、なにをしこるのです?」

「……」

突然後ろから声をかけられて、心臓が止まつそうになつた。ほんとにこの先輩、全く気配がないから怖い。

「通行の邪魔ですよ。用事があるなら誰かに頼んで、廊下で待つべきでしょ?」

「すみません……」

なんだかいきなり叱られる。

「それで、なんの用ですか?」

「え、あの……」

思わず萎縮して何も言えないでいたら、またもや後ろから声が飛んだ。

「えつとですねえ、おみやげですか?」

嬌声の主は、もうひと回り年。

どつから湧いたんだろう?

しかもこきなりあたしの手から髪影を奪つて、タシュア先輩へと差し出す。

「おや、わざわざありがとひびきります」

「わ……」

あいつをつと受け取つた先輩に、言葉が返せなかつた。
あいつと何か一言、言われると思つたのに。

「 素直に受け取るとほ思つていなかつた、とでも言つたげです
ね」

あたしの表情に気付いたらしくて、先輩がそんなことを言つた。

「あ、いえ、そんなつもりじゃ……」

「後輩の好意を無駄にするほど、人間ができるいわけではありません。せっかくですからね、ありがとうございます」

あまりにも素直（？）な反応に、どう言つていいかわからない。
それにどことなく言い訳めいて聞こえるの、気のせいだらうか？
ただ、迷惑がつてるようにはみえないからほっとする。

「すみません、それだけで。本当はもう少し、着たんですけれど…」
先輩、「写そうとすると、逃げちゃって」
「シルファらしいですね。」

さて、授業が始まりますから、あなたたちも教室へ戻りなさい」「はい」
あの綺麗なシルファ先輩を、見せてあげられたのが嬉しくて、軽
い足取りで教室へと戻った。

Sylpha

授業が終わって、私は真っ先に図書館へと足を向けた。タベは遅くなつてからここへ着いたので、学年が違うタシュアとは、帰ってきてからまだ会つていない。

奥のテーブルに、見慣れた姿を見つける。

「タシュア」

「お帰りなさい」

まるでちょっとどこかへ出掛けただけのような言い方が、いかにもタシュアらしかった。

「これを、返そつと思つて。　ありがと、役に立つた」
そう言つて借りていたダガーを差し出す。使つ機会はあまりなかつたが、手元にあつたお陰でとても安心だつた。
傍にタシュアがいるようだ。

「そつですか、それはなによりでした。アヴァンではこりこりあつたようですね」

「ああ」

どこからどう話していいか、わからないほどだ。

どう切り出そつか考へていると、タシュアが先に口を開いた。

「そつ言えば、今回は珍しい格好をしたよつですが

「珍しい格好……？」

なんのことだひうか？

「パーティがあるとかで、ドレスを着たのでしょつへ。

スカートが苦手あなたにしては、珍しいと思いますが？」

「……なつ、どつ、どうしてそれを？！」

突然言われてうろたえる。

「今朝、ルーフェイアとミルドレッドが、写影を持ってきてくれましたよ」

そう言つてタシュアが差し出した写影は、確かにあのアヴァンの屋敷でみんなで撮つたものだつた。

薄紫のドレスを着た自分が、中央に浮かんでいる。

「だつ、ダメだつ！ そんなの ！！」

慌てて手を伸ばす。こんな格好をしたものを、タシュアに持つていてもらいたくない。

「おつと」

だがタシュアのほうが一瞬早く、ひょいと写影を引っ込めた。

「あつつ……」

勢い余つてテープルに顔から突つ込む。

「そんなに机が好きだとは、知りませんでしたよ
「誰のせいだ！」

見ればタシュアの顔に、意地の悪い笑みが浮かんでいた。私の様子が、よほど面白かつたらしい。

彼のいじめ癖は今に始まつたことではないが、それにしてもどうしてこう、ひねくれているのだろう。

「それにしてスカート嫌いのあなたがよく、ドレスを着る気になりましたね？」

「いや、それが実は……」

訊かれて、ナティエス以下後輩たちに、脱がされかかつたことを

話す。

正直あれがなければ、絶対に着なかつた。

「おやおや、困った後輩たちですね」「口ではそう言つているが、話を聞いたタシュアは、完全におもしろがつていた。

目の前で同じことがあつても、ぜつたに止めてくれないだらう。それどころか、よけいに煽りそうだ。

「……何か言いたいのだろう?」
ついそんなことを口にする。

「何をひがんでいるのですか？ 困った人ですね。
よく似合っています。綺麗ですよ」

「え？」

今確かに、「綺麗」と……？

騒がしい後輩たちを除けば、そんなことを言われたのは初めてだ
った。

驚いてタシュアの顔を見る。
その顔に、優しい微笑みが浮かんでいた。
急に胸が熱くなる。

「…………ありがとう…………」

なんだかタシュアの顔を見ていられなくて、下を向いた。
どちらも黙つたまま、時間だけが過ぎる。

「あー、シルファ先輩いたたあ」

「ミルドレッド、場所をわきまえてもう少し静かになさい」

静寂を破つた嬌声に、間髪入れずにタシュアの叱責が飛んだ。
もつとも、ミルに効くとは思えないが。

あの子を止められるものが、この世に存在するとは思えない。
見ればルーフェイアをはじめ、シーモア、ナティエス、ミルの4
人組が、仲良く入ってきたところだった。

「すみません…………」

「ルーフェイア、あなたが謝る」とではないでしょ？

「え、すみま……あ……」

何故かミルの代わりに謝つたルーフェイアに、今度もタシュアが容赦なく突っ込む。

「」の子達に、さつきのタシュアなど想像もできないだろう。

「ルーフェイア、黙つてたほうがいいんじゃないかな？」
「どうせ墓穴掘るだけだろうしね。」

シルファ先輩、これを届けにきたんです

4人の中ではリーダー格のシーモアが、私に写影を差し出した。

「あ

「おや

つい2人で、そんなことを言つてしまつ。なにしろたつた今、取り合いをしていたのと同じものだ。

「あれ、いらなかつたですか？」

「え、あ、いや、その……」

何も知らない後輩に、うまく言い繕えない。

「もらつておいたらどうですか？」せつかく後輩たちが持つてきてくれたのですから

「ああ……」

タシュアに言われて、しぶしぶ写影を受け取つた。

だが　周囲に写る後輩たちの、嬉しそうな微笑み。

「そういえば、お礼をしないといけないんだつたな

「あ、ケーキ……作つて、頂けるんですか？」

最初の約束をちゃんと覚えていたのだろう。ルーフェイアが嬉しそうな声をあげる。

「なになに？　シルファ先輩のケーキ？？」

「え、ほんとなの？ うわあ、ルーフェイアいいなあ

「うーん、食べてみたいね」

他の後輩たちも騒ぎ始めた。

それを見て、思いつく。

「そうしたら……今度の休みに、腕によりをかけて作ろう。みんなで好きだけ、食べるといい」

可愛い下級生たちの顔が、ぱっと輝いた。

「それって、お腹いっぱい食べていいくつてやつですか？」

「ああ。たくさん作るから、手伝ってくれないか？」

4人が顔を見合わせる。

「やつたあ！！」

図書館中に、歓声が響き渡った。

F・E・N

お知らせ

明日10／18より、第9作の連載に移ります。

いつもどおり“夜8時過ぎ”の更新です。

第1話は「小説家になろうで検索」「筆者サイト」等で、よろしくお願いします

あとがき

最後まで読んでくださって、ありがとうございました。
感想・批評大歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8569e/>

力の行方 ルーフェイア・シリーズ08

2011年2月7日11時39分発行